る事にて、我が輩も論外に置かんと一度は思ひたりしが、更に考ふるに、此等の作者は、世に言ふ係結の法則を一わたり心得たる上に、進んで斯樣なる新しき語法を造り出でたる者と覺しき節あり。然れば、少し所說を尋常の係結說の上に高めて、果して此の如き變法をなし得べしや否やを論定せむとするなり。右の歌に想も拙劣なるあるは、さる方に見ゆるし給へ。

抑係結の法とは、(一)尋常に活用する詞辭の第三變化にて終止し、(二)ゾヤカナン又は疑詞を受くる時は第四變化連體の形にて結び、(三)コソをば第五變化卽バドモに續く格にて結ぶことなり。何故に(一)(二)(三)の如き變異あるかは、從來いまだ明にせられざれども、さ樣に言はでは、國語は整調せざること萬人の認むる所なり。今我が輩の所思を一言述べ試み置かむに、連體の結は、實は下に體言を略して、用の詞辭を體に言ひなせるもの、コソの結はバドモと續くを强ひて斷ち切りて、其文の强みを利かせたるより出で來し語法なるべし。此の事を詳說せむは、本篇の主意にあらざれば、筆を此に止めつ更に係結の法に特例として見るべきは、(一)の係辭なくて連體語にて文を結ぶことなり。此は下に「コトヨ」などの意を含めたる者として誰しも承認する所なり。

前揭(1)(2)の歌の連體法にて結びたる、さる省略含蓄あるべしや之を有りとしも思ひたらむは、修辭法の濫用なり。(1)は正しくは「經ナマシ」といふべきなれど、略言とすれば「經ヌベシ」と終止すべし。「經ヌベキコトヨ」と聞きて、何の面白きことか有るべき。(2)は「袖ヌレヌ」とあるべし作者は、さては「ヌレタ」と過去に聞えて、宜しからずなどゝも思ひたらむか。其處に誤解あるべし。「ヌ」は過去

にあらで、完了なり。「タ」とも「シマフ」とも今言に當つべし。「ヌレヌ」としても、心配なきなり。(3)は「コソ」を連體にて結べる、尋常ならずとは作者も知りつゝ、尙奈良時代の古言に形容詞ク活シク活の連體にて結べる例あるを、後援としたるにもあらむか。此の語法は、下に「コトナレ」とやうの意を含めたるなるべけれど、此の歌は、さる古調の者ならねば、成るべくは避けたきなり。「身コソツラケレ」にては、作者の意に中らじか。「ウタテキ」は「ウタテシキ」とシク活にも活用する語なれば、「身ゾウタテシキ」などゝもいふべく、又は「ハカナ此ノ身ハ」などもあるべし。(4)は尋常に「妻戸ニハナル」としたらむは、實にも興なかるべけれど、そはナルと終止法に言へる故にはあらで、全體の結構と想との關係なるを思はざるべからず。此の歌ナルといふべきを、ナレといひたりとて、實は、何の興もなきこけおどしといふものなり。まづは「トゾナル」位にて御免を蒙るべきならむか。(5)も同樣に下らぬことなり。コソとすれば一音殖え、ハカナキとすれば一音減るによりての惡戲とは覺ゆれど、近來新派の歌人といふもの得てかゝるすさびをするなり。

黃昏を苍あゆみて物おもふ愁に似つれ萎え行く灯影(6)

目さめたる朝の窓のすきまより白き雲見えうら悲しけれ(7)

など、音數の都合上「コソ」を略して、其丈の意味を利かする便法なりといふに至つては、呆れざるを得ず。(6)は「愁ニ似タリ」にて足れり。(7)は手の入るべき樣なし。「ソゾロ悲シキ」位かゝる語法は修辭の便宜なりとて、勤すべき性質の物にはあらざるなり。ゆめ邪道に迷ひ入り給ふこと勿れ。

二

副詞句（修）

修　主　客　敍　主

あふことは夢にのみこそならひ來て（コヨヒハ）

客　敍　敍

形容小句（修）

現ともなき今宵なりけれ（千五百番歌合）

是は文章論の目より解剖したるなり。およそ文法上の文には必主と敍述とあり、更に客と修飾とに依りて擴げて行く修飾は、主にも客にも敍述にも係り、主と客とは、必敍述に係る此の例に於いて、アフはコトに係り、「アフコトハ」と「夢ニノミコソ」とは「ナラヒ來テ」に係り、以上は副詞句となりて、更に下文全體に係る。下文には主語略せられたり。疑詞及テニヲハの係といふも、此の外には出づること能はず。之を簡單に例示すれば、

主　敍

君こそ　いみじく　歌を　よめ

客　敍

君は　いみじく　歌をこそ　よめ

修

君は　いみじくこそ　歌を　よめ

の三種にして、其の外には係り得ざる理なり。

修　客　敍　敍

君は　歌をこそ　よめども　詩をば　作らざれ

客　敍

などいふは、誰人聞きても調子の合はざるを覺るべし。然るに、前現の歌を見るに、文の敍述ケレと結びたるは、何を受けたるか。その語の主は略せられ修飾にも、はた文の修飾なる副詞句にもコソといふ係はなく、コソは副詞句中の客にありて、「ナラヒ來テ」と受け流したるを、いかで「ナリケレ」にて結ぶべき。相應の古歌にはあれど、傳寫の誤にあらずば、千慮の一失にもあるべし。

三

さて此の種の誤謬は、世に多からぬことなれば、先人もさして言擧はせざりしことなるに、有名なる景樹の

修　客　敍　修　客　敍　修　獨

明けてこそ　見むと　思ひし　箱崎の　波間に　浮ぶ（以上修飾部）　松の　村立

に至りて、世論一時に喧しくなれり。之を正面より見れば、此に解剖せる如く、「アケテコソ」は「見ム」にこそ係れ、「思ヒシ」に係るべき謂なければ誤なりと定めたる諸説は、固より正しきなりされど、別に側面の觀察を要する者あり。そは發音の間隔斷續の如きも、意義とは全然一致するものにあらず。客語の下に添る「ト」といふテニハの敍述語の上に、接頭的に添るなどの變化もあり。俳句詩などには音數の都合上、一連續の語を兩句に裂くことありそれ等より考へ合するに、意義に一致せぬ言語の斷續といふ變例も、絶無といふべからざる筋合も生ずべきにあらずや。

諸越も天の下にぞありときく照る日の本を忘れざらなん新古今

戀しきか形も形こそありと聞け立てれ居れども無き心地する古今

塵をこそすゑじと思ひし四つの緒に老の涙を殘しつるかな著聞集

よろづの事は月見るにこそ慰む物なれ徒然草

此等の例尙多きが、いづれも誤とはし難く、我が耳には調へる樣に響くなり。之を意義の斷續上より、「天の下ニゾアルト聞ク」、「形コソアレト聞ク」としては聲調却つて非なりと感ずる人多きが如し。「塵ヲコソ」は「スエジ」にて結べる者とは見がたし。ジは活用なき助動詞にて、連體には用ゐらるれど、バドには接すべからず。隨つてコソの結にはならず、且之を流せるにもあらず、「思ヒシ」に受けて流す外に途なし。「月見ルニコソ」は「慰ム」にて受けて流して「慰ムモノナリ」としてもあるべき樣なるが、此の儘にて前例に準ずべからざる理なし。されば此等はすべて「アリト聞ケ」、「慰ム物ナレ」などを一連續のものとして係を結べるぞと見て正例に立つべきなり。更に又一考すれば、他の解法あり。そは、コソの地位の轉ぜるものと考ふるなり。卽

「天ノ下ニアリ」トゾ　聞ク

「形モ形ハアリ」トコソ　聞ケ

「塵ヲスエジ」トコソ　思ヒシ

「月見ルニ慰ムモノニ」コソ　アレ

「アケテ見ム」トコソ　思ヒシ　箱崎ノ

ノミバカリにも此の用法あり。旁此の考も捨つべからざるなり。是に於いて、我は景樹の歌をも、其の儘に承認し、併せて同翁の

ゑのころは何の心もなかりけり何の心かありと尋ねむ

といふ歌も正例に收めむと欲するなり。「何ノ心カアルト尋ネム」にては尙聲調を害するなり。

第九　めり

メリは、推量想像の助動詞なる事は誰しも知れども、さて如何さまに推量想像するぞといふに誰しも答へにくきなり。舊說に「樣子ダ」「ト見エル」など釋したるは略當れるが、之を「ダラウ」「ウ」「ヨウ」と聞きては、大に誤るなり。

かく言はゞ、氏は「そは複語尾ゆゑ別なり」ともいふめれど云々某文法論

此は「ベケレ」といふべきを誤れるなり。メリとベシと、活用は、ラ行變格的とク活とにて異なれど、メとベとは音義上同類なるべく、かくも言ひつべきかと思はるれど、決して此の如き用例も意義もなきなり。又

夏の盛を箱根鹽原などにて送りたらんには如何に心のゆくわざなめり

などいふ文も見しことあり。此は「ナラム」を誤れるなり。抑此の辭は歌語に用うること昔より少く、今人は特に使はぬ方と見ゆれど、一わたり沙汰して置かんに「ナリ」と斷定しても不可なき程の事

柄を言辭の上にて婉曲に和けて「メリ」といふものと心得べし。「ナリ」の想像の「ナラム」又は「ナルベシ」にはあらざること、呉々も忘るべからず。されば、文語にも平安朝以後は極めて少くて、今は然ナンメリ」「ソレナンメリ」などのみ人の口の端に上るは、「ナルナリ」を和けたるにて難なければ、「誰ナラム」といふべきを、「誰ナンメリ」などいふもあるは滑稽の極なり。

大船にまかぢしゞぬき琵琶の湖漕ぎたみ行かば心ゆくめり

君いなば後に殘りし我がともは誰を力に世には住むめる（殘リシ）は「殘ラム」「殘レル」の誤）

「ユクメリ」は未來想像に「ユクベシ」「ユキナン」とやうに、「スムメル」は「スムベキ」といふべきなり。此の二歌の如きは餘に幼稚なるものなれど、轉ばぬ前の杖と言擧するなり。

うたゝねの夜舟こぐまに過ぎぬめり夢の浮橋浮島が原

此の「メリ」はよく當れり。かくツヽなどゝ結合したる場合には、デムナムツベシヌベシなどゝの相違著しく明瞭なるを本としてたどりなばメリの意義も會得せらるべく、更にツナリヌナリに比して、其の稍和ぎたる者なるを思ふべし。今の口語には、ひたと當るもの無ければ、まづはダと指定すると略同じと見て可なり。

第十　らし

一　「ラシ」は、根據ある想像にて、「ラム」の漠然たるに異なり、目に見る場合に「メリ」といふらむ樣の事を、目に見ぬ時に推し定めて、「ラシ」といふ如き心地あり。「立田川紅葉亂れて流るめり」は、遠方よりなりとも、まづ打ち見たる姿にて、「み山には時雨ふるらし」は目には見ず、唯外山なる眞拆の蔓色付けるによりての推定なり。此の二つを取りかへては、意義通せざるは明なり。又「ラム」に比するに、今の口語の「ダラウ」と「ラシイ」との差の如く、「今もかも咲きにほふらん」を「匂ふらし」とは言ふべからざること明なり。

一昨日も昨日も降りし夕立は今日も降るらし雨づゝみせむ　景樹

此は、未來の想像に用ゐたるよりして惡きなり。ラシは「時」に關せぬ辭なるが、先は理在と心得て可なり。此の歌は今の口語の「今日モ降ルラシイ空合ダ」といふやうの意義に聞きたるなるべきが、歌語にはなり居らざるなり。普通に、「今日もや降らむ」と想像の外にヤと疑ふか、それを略しては、「今日もぞふらむ」などあるべし。抑ラシといふ辭、今の「ラシイ」と類似して、中には違ふ事あるを知らざるべらず。今の口語は粗雜にして、「降リ相ダ」「フリゲダ」など動作につきては未來なる事を、「フルラシイ」などいひても通ずること、なれども、文語にては「降リ相ダ」は「フリヌベシ」「フリナム」とこそいへ、「降ルラシ」とも「フルラム」とも言はざるなり。更に又形容詞の「シイ」と「ラシイ」とも別あるを、今は混同して、「雄々シ」「女々シ」を「男ラシイ」「女ラシイ」といふ是も訛言にして正言にあらず。「男々シ」は誠の「男的」にて、「男ラシイ」は實は「類似男的」なり。之を極言すれば、ラシイには似て非なる心も存するなり（此は形容詞としての場合に就きてなり）景樹翁の「歌は歌らしくよめよ」とい

ふ教なども、一わたりはさることなれど、その弊は、似非歌に流るゝこと、此翁の歌に見て知るべく、まして其の末派輩の歌に至りては、唯ラシキのみにて、實なき者の多きこそうたてけれ。「味噌の味噌臭きは眞の味噌にあらず」といふ言の當否は今姑く置きつ、歌よみらしき人の歌に、好き歌少く、豪傑らしき人に眞の豪傑なく、教師らしき人に眞の教師なき樣の事は、疑ふべからざる實事なるに考へて、ラシキ事を鼻先にぶら下ぐることは、戒めたきことゝ思ふまゝを、序に書き添ふるなり。

二　立ちかへり、

網引する海人の子さわぐ明石潟夕立すらしあまのこさわぐ
荒磯にあまの子出でゝさわぐなりいさりの舟や今歸るらし

は如何に。「夕立スラシ」「今歸ルラシ」は、共に、「アマノ子サワグ」といふ根據を有する想像にて適當なるが、後の「舟ヤ」のヤの辭は、折角の推定を疑ひ崩すことゝなりて整はず。「ラシ」に對して疑辭あること、後拾遺集に「聞きつるや初音なるらし時鳥老はねざめぞうれしかりける」といふ歌あれども、此の用法決して宜しからざるなり。又こゝの「ヤ」を疑ならで感嘆なりとも謂ふべけれど、そは私造の語法にて卑しきなり。おしなべて「ヤ……ラム」「ゾ……ラシ」といふ敎あるは、聊語弊はあれど、とかく此の歌は「歸ルラム」とするが整へり。

折々はひれふる魚やさはるらん獨ぞうごく河骨の花明如

此の歌、上にヤなくば「サハルラシ」ともいふべけれど、疑ふ意ある上は、ラムを變ふること能はず隨つて、前の歌「舟ヤ」を活さんとならば、下を「今歸ルラム」とやうに整ふべきなり。

鐘の音絶えずも聞ゆ今日もまた世は何事かあるらしけなり

此の「何事カ」は下に係らざれば、カ辭ありてもラシは難なけれど、ラシゲと續けたるは卑しき無用の重語にて歌語には相應せず。但作者はさる事に拘泥せぬ說なるべければ、此の非難は一般の人に對していふなり。

三　語格階梯異見答書といふ書あり、堀秀成翁の語格階梯に對する里見義氏の異見に、再堀翁の答へし者なり。其の中にある「ヤ…ラシ」の論の大意

階梯　ヤ|カ|の係をラシにて結ぶは誤なること、語格全圖解に云へり。

異見　このラシは一種特別の結辭にしてモニヲハバ又ノガゾヤカコソまで押竝め結ぶは證例のあることにて吾輩異論なし、先輩も其の論なり。ヤは證例數々なり（但カの例は追つて云ふべし。）

山姫の霞の袖や匂ふらし花にうつろふ横雲のそら續拾遺
長き夜に秋の寢覺やふけぬらしさま〴〵になる身のゆくへ哉壬二集
菊の花折りて夜ふけぬ白露は我が手ながらに置きやしぬらし新拾集
五月雨はこよひばかりか時鳥聲もや今の限なるらし同
天の川渡の音聞ゆ彦星の棚機つ女と今やあふらし赤人集

夜舟こぐ櫂の雫やしけからしぬるゝ袂に宿る月影　新後拾遺

答書　詞の玉緒六の巻に「ラシはラムの活きたる辭にて疑の重きと輕きとのけぢめと聞ゆれど、古き歌どもを考ふるに又さる意にもあらぬが如し。但しャ何などの結にはラムのみ多くして、ラシはいといと稀なり。後撰五戀ひ〳〵て逢はんと思ふ夕暮は棚機つ女もかくやなるらし、是も一本には「カクゾアルラシ」とあるより論ぜむ。ラシをラムの活きたるといふは聞えがたきことなり。ラムは疑のまゝに大方に思ふ意なるを、ラシはもと疑はしきものを傍に慥に思ひ定むべき證ありて聢と思ひ定めたる意にて疑の意はやゝ放るればャカを上に置くべき理はあらぬ筈なり。里見氏の引證は後世のものゝ家集か又は赤人集の如き疑はしき書のみにて、之を信ずべきにあらず。「山姫の」は「袖や匂フラム」とあるべく、「長き夜に」は同じく「更ケヌラム」とあるべし。云々。

此の答書の旨よく當れり。赤人集の歌は萬葉集十卷に「天漢梶音聞係星與織女今夕相霜」とあるをひがめたる者にて、赤人集の如きは實に拙劣支離を極めたる者といふべし。天平寶字六年五月高野天皇の詔に此波朕劣爾依亙之加久言良志上念召波とあるも、上にテシのシとありて下にラシといへるを、此等も今の人は惡しくせば「ヨリテャ」とも言ひ兼ぬまじくや。

第十一　可能動詞に對する標的名詞

物かはり星ぞ移れる世の樣をこの埋木に知られけるかな

山中のいでゆの宿のしづけさに晝も夢路をたどらるゝかな

（前略）ながめられけり朝夕に、なれし故郷その空を落合氏、白菊の歌

此等の歌を讀みて別段心に留めぬ人世に多き樣なるが、實は大ぬかりなり。出來る意味のルラルを添へたる可能動詞に對する名詞にヲを添へたるは決して無き語法なり。前の三首の歌「世ノ樣モ」「夢路ノ」「ソノ空ノ」と改めたらむには、誰しも其の穩當なるを思ふべし。凡てこの標的名詞はテニヲハなきとガノハモゾヤカナンコソノミシなど主格助辭を添ふる者とありて、處置格（目的格）のヲは決して添はざるなり。

身の上が案じられる　春の待たるゝ

なほこそ國の方は見やらるれ　酒ものまる

音ぞ泣かれける　十里の道や歩まるゝ

何里か走らるゝ　むだ口なんせらるゝ

君ししのばる　故郷のみ忍ばる

同じ事こそせられけれ

之を何故に人の誤るぞといふに、口語と他の文語との混同よりするなり。今の口語にては「飯ガ食ハレン」を「飯ヲ食ハレン」といひても用は辨ずる心地のせらるゝこと一つ、次には「食フコトガ出

來ル」と同義の「食ヒ得」「食フベシ」「能ク食フ」などは必「飯ヲ」といふより、それに準じて「食ハル」「食ヘル」にも「飯ヲ」と誤ること是二つなり。今此の兩者を區別せんに、「食ヒ得」「食フベシ」などは何處までも他動詞なれば「飯ヲ」と云ふこと當然なれども、「クハル」「クヘル」は可能相にて自動詞に準ずる者なれば、たとひ同義に歸するにしても「飯ヲ」とは言はれざる道理なり。此の誤今の散文に極めて多きこと注意を要す。そは今の文は多く漢文讀より出でたる者にて、その漢文讀には、このラルを用うること絶無なるより、自然にこの標的名詞は皆「飯ヲ」の流にヲ一點張なるを、近代可能相のルラルを時文に用うる樣になりても、尙別の動詞なることに氣づかずして、ヲを濫用するものなり。ゆめ〳〵此等に誤らるべからず。御製の

開け行く時にいよ〳〵仰がれぬひじりの御世の高き敎は

といふを、日月帖に「敎ヲ」と書けるは不謹愼なり。（東京朝日新聞に「敎ハ」とせるぞ正しき）

かけ捨てし鏡の面に影ふれて誰ぞやと影を驚かれぬる景樹

といふ歌も調をなさず。「影ノ」とせむに難なきをや。

第十二　せば

君の爲世の爲何かをしからむ捨てゝかひある命なりせば　新葉集、宗良親王

こは人口に膾炙せる御歌にして、士氣をも鼓舞しつべきものと、おのれは早く思ひ寄りて、さる書にも掲げしを、此の頃ふと讀み上げ見るに、はたと行き詰りて解くべき樣も無き心地せり。そもそも先人は之れを如何に釋しつらむ。一首の意は「命ナルモノ」「命ナレバ」「命ナル上ハ」などあるべきにて、「ナリセバ」にては意味裏表となるべきにあらじか。卽「捨テヽカヒアル故デアル、然ラバ何デ惜シカラウゾ、顧ミナイデ奮戰スルガヨイ」の意なるべきを、此の儘にては「カヒアル命ナラバ惜シクハナカラウシカシ、犬死ダカラ詰ラヌ」といふ意味に聞えはせずやいで「セバ」といふ語の意義用例をたどり見む。

およそ順態假定前提法には、（イ）然あるべき者をさらばと言ひ懸くると（ロ）然はあらざる者又然あるまじき者を虛設して若しさらばと言ひかくるとの二種あり。此の後の（ロ）種は、前に述べたる「マシ」の意義にて反實の虛設なり。之を言語に表すには

（甲）伊藤公兇手に斃れざらましかば
　　斃れざらませば
　　斃れざりせば　なほ長く國家の重鎭たらまし

と樣にいふを正則とし、或は之を略して

（乙）斃れざらむには
　　斃れざらば
　　斃れざすば
　　斃れなば
　　斃れてば
　　斃れたらば

と樣にも言ふべし。されど(乙)の形式は然あるべき者なる(イ)種をもかく前提に言ふなれば、精密には(甲)式を用ひざるべからず。又近時の俗文には

(丙) 斃れざ（らしめば／りし／ならむには）（ならば）

と樣にもいへど、是は歌などには誰も言はぬことなれば、まづ差し措きて可なり。此等の中にて、「マシカバ」「マセバ」の事は已に「マシ」の條下に述べたれば之を略し、「セバ」の用例を見るに、

一つ松人にありせば太刀佩けましを古事記

梅の花ふりおける雪にまがひせば誰かこと〴〵わきて折らまし古今

吹く風と谷の水としなかりせば春來ることを誰か知らまし古今

などすべて「人ニアラズ」「マガヒセズ」「風ト水トアリ」といふ事實に反したる虛設なり。之を

小黑崎みつの小島の人ならば都の苞にいざと言はましを古今

けふ來ずば明日は雪とぞふりなまし

風と水と無くば誰か春の來るを知らむ

とやうにいふは略言なり。(イ)種の前提を「セバ」にて表すことは例もなく理もなし。さるは「セバ」の「セ」は動詞「ス」の第一變化にて、他の用言の第二變化に之を附くるは、特に或る意味を添へむとするよりせる事にて、「アラバ」「マガハバ」「ナクバ」にては(イ)種の前提と區別すること能はざればなり。こゝに念を入れて「命ナリセバ」と續ける例の歌のみを調査するに、

思ひ出でゝとふ言の葉を誰見ましつらきにたへぬ命なりせば後拾遺

たらちめや留りて我を惜まゝし代ふるに代る命なりせば千載

ながらへて物は思はじ今のまの憂きに限れる命なりせば續古今

程ふべき命なりせば誠にや忘れはてぬと見るべきものを玉葉

限ある命なりせばめぐりあはん秋ともせめて契りおかまし新拾遺

此の五首皆「云々ノ命ナラズ」といふ事を下にふまへたり。然るに少し後の世になりて

いかゞせん逢ふにかへんと思ふ身のそをだに待たぬ命なりせば新後拾遺

つれなしと人には見えじ有りはてぬ契にかへし命なりせば新葉

此の二首は(イ)種前提の意にて、宗良親王の御歌と用法相同じきは如何なる仔細かあらむ。こゝに合せて三首の異なる用例あるを是認せんとすれば、それより以前の幾十の用例を捨てざるべからず。おのれは道理上より且多數につきて、此の南北朝時代のは不用意に誤用せるものと斷ずる外なしと思考せざること能はず。隨つて章首の御歌も畏けれど誤として大方の注意を乞はむと欲するものなり。

かゝる誤用近代に至りては却りてをさ〳〵見えぬは學問の進めるにやあらむ。たゞ海上胤平翁

の長歌の中に

たま〳〵に人と生れて人の道守らざりせば
梟に等しかりけり狐にもひとしかりけり

とあるは、奇拔とやいはむ、下句に「ケリ」と押へたるなどあまり武斷ならずや、清正を詠じたるに

浪華津の蘆の若葉に吹く風も君いましなばすさまざりけん

是は、想は尋常なるに、惜しき語遣なり。「ナバ」は(イ)種前提にて、「ケム」も事實の想像なり「君シイマサバスサマザラマシ」とせば合格すべし。「イマサバ」は(ロ)種前提の略式なり。此の前提に完了「ヌ」を誤用せるに對して、直接終止の結に用ゐたる誤もあり。

吹き返す風だに無くば葛の花葉かげながらにちりやはてなん

此の「ナクバ」は略式にて可なるが、「果テナム」は是非とも「果テマシ」と反實虛設の想像に言はざるべからず。

第十三　ぬ

一　明治二十年代に國文の勃興せし頃、「ヌ」といふ助動詞の濫用せられしこと今に記憶に殘れるが、近來は歌にも屢さる事の見ゆるなり。これは第一回に略解說せし事なるが、今の口語に「タ」といふは文語のツ・ヌ・タリ・リ・キ・ケリの六つに通ふより起ることにて無理ならぬ樣にもあれど、「テキル」などにも「ヌ」を充つるは妄といふべし。今最心得易く誤の甚しきもの二三を指摘すべし。

老人が生ける敎の物がたり月は若きが面わ照しぬ

こは常盤會詠草中の名ある歌のよし、まこと一寸面白くは誦せらるれど調子の合はぬは耳立たぬにや。此の儘にては「月ハ若イ人ノ面ヲ照シタ」なるが、「照シテキル」又は「照ス」と目に見る樣に畫の樣に言ふべき語氣の場合にて、「照セリ」として始めて落ちつくべしと我は考ふるなり。「秋ノ野ニ道ハ惑ヒヌ」「櫻狩雨ハ降リ來ヌ」「秋ハ來ヌ紅葉ハ宿ニ降リシキヌ」など、比較し見れば、其の區別明なるべきをや。

二　そら色の衣を吸はせて君ありぬ椅子のうしろの藤の網代に

あな熱き君が口つけあな眞ひる日は中空にくもりてありぬ

此等は新派某宗匠又はその選にて、眞面目なる人は「アリヌ」などいふべくもあらねど、轉ばぬ先の杖其の理をいはんに、「アリ」といふ存在動詞は、動作的ならねば、完了のツ・ヌ・タリなどは添はざるもの、口語に「アッタ」といふは過去にて「アリキ」「アリケリ」と云ふ古歌に「アリヌヤト心ミガテラ逢ヒ見ネバ」といふは珍しき例なるが、そは「アリヌペシャ」の意、「サモアリヌ」なども然り。かくて此の歌、前のは「君居タリ」「君ゾ居ル」にて事足るべく、後のは「クモリツヽアリ」にて可なれど、修辭は拙なり。とにかくにヌは共に不用なるを音數足らずとて强ひて添へたる非事なり。

大木の幹に耳あて小半晌かたき皮をばむしりてありき

前の「アリヌ」と似たるが、キと言へるは實に過去の事を言へるにやあらむ「ムシリタリ。ケリ。」とやうに言ふべき意にや、分らず。

鏡とり能ふ限のさまゝ〳〵のかほをして見ぬ泣きあきし時

愛犬の耳きりて見ぬ要するに物にうみたる心なるらん

共に恐しき歌なるが話のみをいはゞ「見ヌ」は共に「見ツ」とあるべし。こゝは「見ル」といふ動作をそのまゝにとゞめたるにて、動作的に「ツ」と抑ふる定なり。「ヌ」は狀態的に緩に傍觀的に敍事的なるを受くるなり。

時計鳴るいくつと知らずたゞ時の進むを感じ靜やかに居ぬ

板庇かたぶく軒のくらがりにちご泣き居れり秋風の家

ふる里のさぬきといへば鹽けぶり風になびくをのみ描き居ぬ

此の二つの「居ヌ」は「チリ」といふべく、中の「チゴゾ泣キチル」とあるべし。かくて「チルリ」といふ語法は無きことなれど、文部省の許容案といふ者にては俗文に許すことゝしたれば、歌もそれに均。霑すとせば、まづ勝手として「キヌ」と「ヌ」を添ふるよりはよく、語氣は正しく表れ居るなり。さて文語「ヲリ」は「居タリ」の義にて、許容の「チレリ」に當る。こゝは「キル」とのみ言ふべく「キタ」とは言ふまじきこと前の「面ヲ照シヌ」と同じ。古歌と誦しあはせて其の意義と語氣と調との異なるを知るべし。

し。

一八に似し草ありぬ塚の邊に

これも宗匠の選句なるが、いみじくも振ひたるものかな。「一八ニ似タル草アリ」の意にはあるまじきか。さもなくば「アリキ」なるべく、音數は別に工夫を用ゐて都合せざるべからず。

第十四　つゝとけり

一　「ツ、」は連用法附屬のテニヲハにして「ケリ」は過去の助動詞なるに、此の二つを對せしめて題とすること、讀者はまづ見て怪まむか。然り。これは文法上には對位すべき者にはあらねど、修辭上短歌に於いては、此の對比を試みざるべからざる由あり。近く八田知紀翁の

諸人のたもとにかへる春の色は降る白雪も埋みかねつゝ(イ)

といへる歌を、海上胤平翁の「ツ、はケリと言はでは調はず」と評せしは當れりや否や。古き方より檢し見るに、後撰集に、天智天皇御製として載せたる、

秋の田のかりほの庵の苫を荒み我が衣手は露にぬれつゝ(ロ)

は萬葉集卷十に讀人不知として擧げたる「秋田刈る借廬を作り吾が居ればゾ衣手寒く露ゾ落チタルカ」置きにける」を訛れるならんとの說なるが、原歌のケルをツ、に改めたるは早く此の頃より、兩者の相通と人の嗜好の異なりしとを知るべし。續いて新古今集の、

田子の浦に打ち出でゝ見れば白妙の富士のたか嶺に雪はふりつゝ(ハ)

は萬葉集卷三の「田子の浦ゆ打ち出でゝ見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」の改作なること知られたるが、此の頃に至りては歌人の頭腦麻痺して、漠然と此にて意通ずと思ひなしけむと見ゆ。更に古今集に立ち上りて見るに、光孝天皇の

君が爲春の野に出でゝ若菜つむわが衣手に雪はふりつゝ(ニ)

に至りて、「ツゝ」の用法意義始めて尋ぬべし。抑「ツゝ」は動作の重複、反復を表す連用辭にして、固より終止の者にあらず。其の文末に居るは、必別に連接すべき用言あるか、若しくは下に「アリ」などの語を略して繼續存在、進行等の態をなす者にて、此の御製及

山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ(ホ)

などは、第五句より初句に返りて「若菜ツム」「ワビシケレ」に收る者、

宿りせし人の形見か藤ばかま忘られがたき香に匂ひつゝ(ヘ)

風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬ影さへ底に見えつゝ(ト)

梅が枝に來居る鶯春かけて鳴けどもいまだ雪はふりつゝ(チ)

などは下に「アリ」を略せるなり。而して、此等の「ツゝ」を口語に譯せば、(ニ)「雪ニ降ラレ〳〵」又は「降ラレナガラ」、(ホ)「サマシ〳〵シテ」、(ヘ)「匂ヒ〳〵シテキル」、(ト)「見エテキル」又は「見エ〳〵スル」、(チ)「降リ〳〵スル」又は「フツテキル」などに當るべく、前に言へる「動作の重複反復」は、必しも間斷なき

を要せざるは、(ホ)(チ)などの例に見るべし。是に於いて(ハ)の歌を見るに、「田子ノ浦ニ出テ見ルト富士ノ高嶺ニ雪ハフリ〳〵シテ居ル」と解する外なく、其の「降リ〳〵スル」動作は間斷ある方の義にても差支なけれど、「打チ出デゝ見レバ」といふに對しては、繼續せる動作ならざるべからざれば、如何に讓歩しても事實有るまじき事に歸せざること能はず。(ロ)の歌は「露ニヌレテキル」又ハ「ヌレ〳〵スル」にて意義は通ずれど、なほ萬葉の原歌も棄てがたし。

二

顧りて「ケリ」の意義を求むるに、是は「キアリ」といふ樣なる意にて「キ」と過去に言ひたるを「アリ」と狀態的繼續存在的にしたる、繼續存在過去などゝも謂ふべく、又傍寫的間接敍述過去などとも謂ふべき者なりされば有りし動作を傍寫的に物する物語の地の文などは「皆男アリケリ」とやうに「ケリ」を用うるなり。今(ロ)の原歌に就いて見るに、「衣手寒ク露置キニキ」といふ直接の過去動作を間接に然ありと傍寫して「オキニケル」事よと歎意を含めたる者にて、正に過去なるを「濡レツゝ」と改むれば、現在の事になるなり。(ハ)の原歌も「降リケル」なれば、「フリキアリ」と降れる動作は過去ながら、今に繼續して眞白に見ゆる意にて、好く實景を得たる者なり。之をいかでか過去の意なき「ツゝアリ」といふを得べき。凡「ケリ」の本義此の如くなるが、轉じては道理をことわり、其の事を感歎する意にもなるべさるは、物の道理は、過去の經驗に徵し來り、有りし事實は眞理に相違なければにぞあらむ。之を口語に「タワイ」とやうに充て、又「テキルワイ」といふ現在の感歎をも「ケリ」に充てゝ、歎じことわる意を深くするが、早くより修辭上の慣例となれり。是に於いて、「ツゝ」と「ケ

リ」とは稍交渉の途を開き、現在の事實をことわりの樣に「ケリ」と欺じ言ふことを得るやうになりたるが、さりとて「ケリ」といふ過去事實を「ッ、」と現在に言ふことは道理も無く慣用の例も無きことなるを知らざるべからず又「ケリ」とことわるも、現在に動作の進行し反復する樣に言はざるが却つて意長き場合に限るなるを忘るべからず。例へば在原元方の

あらたまの年の終になるごとに雪も我が身もふりまさりつゝ(リ)

といふは、「雪モ冬ノ終トテ降リ增リ、我ガ身モ年々ニ舊リ增リ、兩ツノ者ガ同ジコトヲシツ、アリ」といふ意なるを、「ケリ」とことわりては、不倫なる「雪」と「我」とを合類せる作者の感想は沒却せらるるなり。此の歌及前の(ト)(チ)或は甚しきは(ヘ)の歌なども、今の人はやゝもすれば「ケリ」と言ひもし解しもしぬべく恐れらるゝは、あらじかされば、前の(ニ)(ホ)及井上通泰氏の「君が代は荒野ぞ多くなりにける開けぬ國の御手に入りつゝ」の如く、前に返る「ッ、」止めには、今の人も誤ること少けれど、下に略語ある「ッ、」どめは、頗危きなり。

人皆のあはれと聞きし蟲の音も暮れ行く秋を止めかねつゝ(ヌ)

の「ッ、」は「ナガラ」としても「止メカネテキル」としても「止メカネ〳〵スル」としても聞え樣なし。「ケリ」はあまり平凡なりとてかくや修せられけむ覺束なき歌なり。

三　さて今は(イ)の八田翁の歌を判定すべき時とはなりぬ。此の歌の意は「雪ハフレドモ春色ノ顯著ナルヲ埋ミ兼ネタリ」となるべく、飽くまでも理にかけて反復や繼續進行などの意はつゆ見えざるを「ッ、」といふべき謂れは何處にかあらむ。論なく海上翁の評に傾聽せざるべからず。八田翁また之を聞かば、推敲の至らざりしと、輕く首肯すべきなり。

亡き妻の形見のちごの霜さゆる夜中に泣けば父も泣きつゝ(ル)

寒くしてねられざりけり宵のまに飲みし寢酒もいつかさめつゝ(ラ)

雨戸うつ嵐の音もさえ〳〵て長き夜すがらいをねかねつゝ(ワ)

とけてねぬ夜半の枕に響くなり蟲のつぶてうち騷ぎつゝ(カ)

大丈夫も今宵は口に出しけり烈しき寒さ凌ぎかねつゝ(ヨ)

火桶かへ衾重ねて冬の夜をいたはる妻も共に老いつゝ(タ)

山蔭の草の庵は寒けれど衾一つに夜を明しつゝ(レ)

とる筆も忽凍る夜半も猶旨人は笛を吹きて行きつゝ(ソ)

此等の中、(カ)と(レ)は當れり。タは(リ)の如き意ならば可なれど、「老イタリ」にてもありぬべきか。(ル)は都べて覺束なし。(ラ)(ヨ)は共に「テ」といふべき場合なり。(ワ)は「ケリ」なるべし。(ソ)は「行クナリ」なるべし。

第十五　かなとなり

一　四十三年の御歌會の豫選歌の中に

降る雪をまづめづるかな月花のたのしみ長き年の始に

といふは、如何にも好き歌に相違あるまじく、おのれも敬服する所なり。されど度々誦し見るに「カナ」といふテニヲハは少しいかゞと打傾かれ(「樂長キ」も穩當ならず)試に「マヅメヅルナリ」と改めては如何にと人に問ひしに、贊成すると反對すると略同數なりき。實をいへば、おのれは「マヅメヅルナル」と言はまほしきなれど、さては今人の口には物遠からむと思ひて、少し俗に碎けて「メヅルナリ」と言ひしなり。其の後又「マヅコソメヅレ」にては如何にと言ふ人あるに、其も一案なりと思ひも寄りぬ。抑「カナ」と「ナリ」とは、意義の頗異なる者なるに、如何なる由ありてか斯くはまがふらん、考へずばあるべからず。まづ「カナ」は名詞に附きて「夜半ノ月カナ」「山櫻カナ」といふやうに感歎する助辭にて、其の用言に附けるは、連體法の下に名詞を略せるなり。前の「メヅルカナ」も「メヅルコトカナ」の意にて、用言に附くべき性質の者にあらざるは一考すれば、直に悟らるべし。さて此の助辭は、「カ」と「ナ」の複合なるが、「カ」は疑問にも感歎にも用うれど、「カナ」となる時は感嘆のみにて、疑問の意には用ゐざるが、「カモ」と異なる點なり。「ナ」は今の口語にいふ「ナァ」と同義にて、「契リキナ」「移リニケリナ」「見セバヤナ」の「ナ」と同じ次に「ナリ」は體言に附く助動詞にて「ニァリ」「デァル」「ダ」「ヂャ」の義、卽指定説明なり。其の用言に附くは、連體法の下に名詞を略せるなると、前の「カナ」に同じきが、終止法に附けるは、上の語句を一團の者と見て「丈夫ノ網ノ音スナリ」とやうに指定するなり。かくいへば、「カナ」は感歎のテニヲハ、「ナリ」は指定の助動詞の區別判然たれど、指定一轉

すれば一種の感嘆となるを以て終止に附く「ナリ」を感歎なりと説明するより、混同を來す次第なり。感歎の「ナリ」といふことは、便宜上差支なけれど感歎のみにて指定の義なき者と思ふが誤の本なり。連體用言に附ける「メヅルナリ」にても、「メヅ」に比すれば感嘆強意の義をなすことは、口語に「賞翫スル」と「賞翫スルノヂャ」とを比較するにて察すべし。(口語「スルノ」「スルン」といふが連體用言を體言にしたる符徴なり)更に之を「賞翫スルヂャ」「オレハ早ク歸ルダァ」と、終止用言に直接に「ダ」を附けて言ふ時は感歎強意の義更に加るを見れば、「スルナリ」よりも「スナリ」の方感嘆の義切なるが、而も別物にはあらで唯用法の異なるに因ることを知るべしゝに前説を總合して、類似せる場合の「カナ」と「ナリ」とを一言に別たば、「カナ」は提示的感嘆にして、「ナリ」は指定的感嘆なり。されば「サテモ……コトカナァ」「コトヨナァ」などには「カナ」を用ゐる「ヂャナァ」「コトデァル」「コトデァルワイ」などの場合には、「ナリ」を用うべきなり。「皆人は花の衣になりぬなり苦の鈇よわきだにせよ」(遍照)は「ナッタヂャナァ」にて「女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとり立てれば」(兼覽王)は「見エルコトヨナァ」なり。「見エルコトカナ」も「見ユルコトナルカナ」の略にて「カナ」といひても「ナル」といふ指定の義あるは同じと説く人あり。いかにも從來は皆「ナリ」を補ひて説きしなれど、さては痛く語氣を損ずるなり。我が國語には指定的に言ふと提示的に言ふと、二つの語法あること近來漸く自覺せらるゝに至り、之を呼喚體の文とか提示句提示文とか稱するなり。

二

若竹の節は白くも見ゆるかな新皮落ちて程なかるらむ

箱崎の浪路はるかに見ゆるかな君が經ぬべき千代の松ばら

前のは愚劣後のは高崎大人の秀歌にて、明治の歌の幕の内なるべく、竝べ揭ぐるも禮なき心ちすれど、「見ユルカナ」といふ語は似通ひたり。而も兩者共に「見ユルナリ」とあるべき格にはあるまじくや。兼覽王の歌の「見ユルカナ」とは異なりと見ゆるなり。

有明の月の光とまがふかな曉深く積る白雪

有明の月の光とまがふかな落葉の上における朝露

これは、上句共に同じきは珍しきが、「カナ」は「若竹の」よりは利きたり。されど、「ナリ」とも「マデ」とも言ふべし。

自露の霜となり行く宮城野の木の下蔭の月を見しかな景明

有明の閨の寒さに寢覺してしづゝ雪の音を聞くかな

などは慥に動かざる「カナ」なり。凡今人の歌も、五句の「カナ」は大抵聞えたれど、三句切の危きが多し。初心の人妄に學び給ふべからず。桂園派の人、殊に愼むべし。

三

歌はコトワルものにあらずとて、指定すべきを只管提示的にのみ詠ずるは柱に膠するものなり。古今集時代に流行せる「ベラナリ」といふ語は「ベキカナ」に近き意義なるが、「カナ」と言はぬ處に妙もあるなり。「くらぶの山も越えぬべらなり」「はてはもの憂くなりぬべらなり」などに就きて試み見るべし。古今集の歌の結末を調べ見るに、「テ」を一として「ツ、」は三、「カナ」は六、「ナリ」は八、「ケリ」は三十位の比例となる。徒に古人の口癖を模すべしとにはあらねど、意義を損ずるまでにシラベむとするも、愚ならずとせず。

さて「ナリ」は、「ケリ」にも「ツ、」にも通ふ如く見ゆることあれども、語は飽くまで混ずべからず。

深山には松の雪だに消えなくに都は野べの若菜つみけり古今

み吉野の山の白雪積るらし故里寒くなりまさるなり古今

曉の月の影かと窺へば窓には雪のふり積るなり

此等「ケリ」も「ナリ」も慥に落ち着きたり。「若菜ツムナリ」「ツミツ、」「ナリマサリケリ」「ナリマサリツ、」「フリ積リツ、」など言はれざるにはあらねど、言變れば事また變り行くを思はざるべからず。

附けて言ふ感嘆のテニヲハは「カナ」の外に「ヤ」「カ」あり。「されば よな」「人の知らぬよ」「我は思ふよ」などの「ヨ」あり。「契りきな」「咲きにけらしな」「我は戀ひんな」などの「ナ」あり。古くは「ネ」「エ」などもあること、初心の人は注意し給へかし。

（明治四十四年二月十五日發行）

附錄二

文法雜纂

目次

助動詞「らむ」の意義……七七五
一 想像辭の類別　二 「らむ」に當る今の言葉　三 口語譯は出來ぬ
四 疑問

「らむ」について又……七八四

「ごとし」の論……七八八
一 「ごとし」は助動詞と定むべきか　二 助動詞の二種　三 半體半用の語
四 「ごとし」の意義及語源　五 結論

日本語の動作と狀態……七九九
序　一 あり　二 す　三 ず　四 つ、ぬ、き、けり、めり、べし
五 主格と賓格　助辭「の」　六 能性動詞の目的　七 狀態的の敍述語の客語

國語に特有な文の三體……八一六
第一　崇敬體……八一六
一 一個のまゝの敬語　二 助動詞　三 助辭　四 接頭語　五 接尾語

助動詞「らむ」の意義

「らむ」は想像(推量)の助動詞だといふことは誰しも知つて居るが想像には色々の言方があるので隨つて「らむ」の意義を心得かねて誤る人が相應の學者にもある樣に思はれる。で、此の意義を說くには、まづ想像の助動詞の概略の類別をして置かねばならぬ。

一　想像辭の類別

1、む　不定時と未來とに通ずる。
2、べし　不定時と未來に通じ、適當可能義務等の意味を含む。
3、まし　過・現・未に通ずるが、多く假定の意味を含む
4、まじ　「べし」の打消「さるべし」「べからず」に通ずる。
5、けむ　過去の想像(無かつた事は假定せぬ)
6、めり　現在、「なり」を和けていふ。
7、らし　現在の事を、或る根據によりて想像する但「けらし」と過去辭にも結合する。
8、らむ　現在の動作ばかり想像して、未來にも過去にも係らぬ。

かやうに八種ある中、「けむ」「まじ」を「む」「べし」に附屬させれば、六種となる。その「む」「べし」「まし」は未來に係る點で、一種になり、「めり」「らし」「らむ」は未來に係らぬ點で、又一類になるけれども此の六種には其々の意味があつて前の二類に分けた丈では、とても分らぬ。それに今の語では、想像辭はウ・ラシイの外に比況のヤウダやト見エルなどが手傳をして居る位で、簡單になつて居るから、此等の古語は誠に心得にくい。例へば今は想像といふと、ダラウ一點張で通る樣なものゝ、ダラウは文語のナラムにこそ當れ、ムやマシやラムなどにはとてもはまり切らぬ。

二　「らむ」に當る今の言葉

古今集の春上第二に「袖ひぢてむすびし水の氷れるを春立つ今日の風やとくらむ」とあるのを、遠鏡に「袖ヲ濡シテスクウタ水ノ氷ッテアルノヲ春ノ來タ今日ノ風ガ吹イテ解スデアラウカ」と釋し、同第六の「春立てば花とや見らむ云々」をば「春ニ成ッタレバ花ヂヤト思ウテヤラ云々」と釋してある。是でも大體の事柄の意味は分るだらうが、言葉の意味は釋けて居らぬかういつては「とくならむ」「花と見てにやあらむ」といふ語に當る丈のことしかし是は宣長先生の惡いのではない、譯し樣がないのだから、遠鏡の端書に色々と辨じて置かれたそれは、

らむの譯くさ〳〵あり。（中略）「いつの人まにうつろひぬらむ」などはイツノヒマニ散ッテシマウタコトヤラと譯す。ヤラらむに當れり。「人に知られぬ花やさくらむ」などは人ニ知ラサヌ花ガ咲イタカシラヌと譯す。カシラヌやとらむとに當れり又上にやなどいふ疑問なくてらむと結びたるにはドウイフコトデといふ詞を添へてうつすも多し。又「相坂の木綿付鳥も我が如く人や戀しき音のみ鳴くらむ」などは、人が戀シイヤラ聲ヲアゲテ只管鳴クと譯す是はとぢめのらむの疑を上へ移してやと合せてヤラといふなり。ヤラは卽やらむといふことなり。又「玉かづら今は絶ゆとや吹く風の音にも人のきこえざるらむ」などの類も同じく上へ移してやと合せてヤラと譯して、下の句をば一向にオトヅレモセヌと落しつけてとぢむ。此等はらむと疑へることは上に在りて下にはあらざればなり。

遠鏡の解釋としては、まづこれ位で濟むでもあらうが、如何にも茫漠としてゐる。それに「らむと疑ふ」などいふ說もよろしくない。疑と想像とは別物である。よし俗の語には同じに言つて分る場合があるにもせよ、言葉の學問の上では明に區別を立てねばならぬ。疑つたらば疑問文、想像したのは只の敍述文で、甲か乙か分らぬことは疑ひ、甲だらう、乙だらうと思ふのみで、斷定されぬことは想像するのである。富士谷成章は「あゆひ抄」には

里「デアラウ」といふ。其の心いづれも見えたる物と隱れたる理とを合せてよめり。細にいはゞ、人を見て心を知ると、木を見て花を思ふと、草を見て種を疑ふとの三あり。さてらむは人をも受け心をも受くるあゆひなり、人をも心をも顯してよめるもあり、片つ方を省きてよめるもあり、片ひゞきの歌もこれに同じ。

萩が花散るらむ(チルデアラウ)小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

(中略)「なるらむ」とつきたるは正しく當てんには里言ゆき合ひ難き故に假に裝(ヨソホ)卽動詞を受けたるは「ノデアラウ」名を受けたるを「チヤモノデアラウ」と當てたり。

など言つてあるが、如何にも粗末で、本書中の他の部分より劣つて居る。その上「たらむ」などいふのまで此のらむの仲間に入れて居る。

三　口語譯は出來ぬ

かやうに古人の說はあるが、いづれも不完全、結局口語に譯すことは出來ぬのだと思ふ。そこで自分は唯解釋丈を付けて置く。

第一　らむは現在(現存する)の動作を想像する。

憶良らは今は罷らむ子泣くらむその彼の母も吾を待つらむぞ

罷らむのむは未來の動作の想像である。「今は」といふ副詞は事實上では現在の事をいふのだが、言語の上では過去にも未來にも言ふ。マカル動詞がまだ行はれない點から慥にマカラウと未來である。是をマカルデアラウと言つては、マカルを名詞にして其の事實をデアルと指定する不定時の想像となるから意味が通らぬ。

泣くらむは憶良が現在家に居つて子が泣く動作中にあるのを想像する語。強ひて云へば「泣イテ

ルダラウ」と完了現在(存在態)の想像に近い。之を「泣かむ」ナカウとしては固より通らず、又「泣くならむ」ナクダラウとしては、ナクが名詞卽事實となりて動作そのまゝを想像する語氣が現れぬ。

待つらむも同樣。「待たむ」「待つならむ」は未來又は不定時の「待タウ」「事を指定する想像の「待ツダラウ」「待ツ事ダラウ」となりて待ツ動作そのまゝを想像することにならぬ。ダラウは名詞を指定するダの想像卽文語の「ならむ」だといふことを忘れてはならぬ。「なり」は決して動詞を指定するものでない。此の「待つらむ」を强ひていへば矢張「待ツテルダラウ」に近いが、もし「待ッテョウ」とすると、自己の決意をいふ語か又は未來完了の想像に誤られる恐がある。但しダラウでは語氣のうつらぬことは前同樣。

色も香も同じ昔に咲くめれど年ふる人ぞ改りける

故郷に今宵ばかりの命とも知らでや人の我を待つらむ

あごの浦に船乘すらむをとめらが玉裳の裾に潮みつらむか(萬一、人麿が京に留りて伊勢行幸を思ひて詠める)

すらむみつらむはすみつの動作の現在にあるを思ひ遣つて想像したの「咲くらめ」は咲く動作は現實にあるが、其の修飾語「色も香も同じ昔に」といふのにかけて想像し「待つらむ」も待ッテルことは現在の動作だが、それを「云々とも知らで」にかけて想像したのである是は他の想像辭にも澤山例のあることだから略して、「玉の緒」に「かなの意に通ふらむ」として十五首ばかりを擧げてゐる、その

久方の光のどけき春の日に靜心なく花の散るらむ

は「あゆひ抄」を始め、通例「ナド」「何トテ」といふ語を添へて解釋して居る自分の考では、花ノ散ルノハ靜心ナクナラム（語氣ハウツラナイ）といふ樣に言つたもので、ナドなどを入れては歌の意が大變まづくなる樣に思ふ。殊に五十嵐力氏の文章講話に、「此の歌は精確を缺いてる」とやうに言つてあるのなどは最感服しかねる。但しいづれにしてもらむが現在動作の想像であるといふことは明で、誰れもさう思つて居るらしくほんやりと解釋してゐる。

第二　らむは現在完了には係るが、過去には係らぬ

完了を小過去とか半過去など言つて居る人には分らないが、つらむぬらむは完了想像、つべしぬべしは未來完了、けむは過去想像と、ちやんと區別を立てねば、とても日本の文章は解されぬ

人は皆しづまりぬらむ（徒然草、時賴が宣時を呼んだ處）

昨日までさばかり有りけむものを夜の程に消えぬらむこと、言ひくんずれば（枕、雪山の段）

誰が玉章をかけて來つらむ（古今）

しづまりぬらむはシヅマツタラウと譯してよい。もう寢てしまつたらうと完了したことを想像したのである。もし之れをヌベシとでもしようものならシヅマリ相ナ・シヅマルダラウとやうに未來完了となる。

消えぬらむは、今は消エテシマツタ事は事實であるが、昨日までは慥にあれ程も有つたものを、一夜の中ニ消エタラウ其の事よといふので、らむは「夜の程に」强くかゝる。けむはしを婉曲に想像した丈、之をツラムとしたら昨日の過去にはならぬ。

來つらむは來つることは事實だが「誰ノ玉章ヲカケテ」と想像したので皆現在の想像である。

らむを過去に誤ることは、まづ少いが、誰れやらが

誰が方に靡きはててか富士の根の煙の末の見えずなるらむ

を破格だと言つたその理由は、ハテ、のテ（完了）は過去だのにナルラムといつては呼應せぬ故にナリケムと直すがよいといふ說を出したことがあつたと記憶するが、是れは以つての外で、見エズナル動作はハテ、カラでなければ起らぬから、ハテ、と言はねばならず、又ナルラムと現在を想像せねばならぬ。少し似たやうな話だが「玉藻」にある。

（春や來ぬらむ）必「春は來にけり」「秋は來にけり」とあるべき歌を初學の輩など詞の艶なるを好むとては「春や來ぬらむ」「秋や來ぬらむ」とよむこと多しそもけりとらむとのけぢめをも知らぬ程の人はせん方なけれど、是ばかりの事はよく辨へつべき程の人も、折々此の事あるは如何にぞや。

立田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦中や絶えなむ

をタユラムとかタエヌラムとしては、聞えない譯で、隨つて近代の文なり歌なりに未來に用ゐたらむは皆誤とするより外は辯護の法もないのである。

さりともとかきやる浦の藻鹽草誰が下り立ちてかづき上ぐらむ（雲倉右府）

行けど行けど行けど松原小松原かくて山路に今日は暮るらむ(佐々木弘綱)

御惠の露あたゝけし來む春はいかにのどけく花や咲くらむ

量り知られぬ樂しさを容れなば渡つ大海も溢れて空をや涵すらむあふれてや空をひたすらむ(新曲浦島)

かういふ例は、いくら有つても正しいことにはなるまい。

四　疑問

とは言ふものゝ、此處に問題といふのは、

かへりごとはいかゞすべからむ、この餅膠もて來るには物などやとらすらむ知りたる人もがな(枕草子春曙抄七卷)

「春は來にけり」は俗語に「春ガ來タワイ」といふ程の意、「春や來ぬらむ」は「春ガ來タカシラヌ」といふ意なり然るに「春ガ來タワイ」といふべき所を「春ガ來タカシラヌ」といひて聞ゆべしやは、よく思ふべし。

何をして身の徒らに老いぬらむ年の思はむことぞやさしき(古今)

此の歌を朗詠には「老イニケム、……コトモヤサシシ」としてあるのは悪い又萬葉集一卷の川島皇子の

白浪の濱松が枝の手向草幾代までにか年の經去良武

に「一本云經爾計武」と添へてある方も面白くないが、前の歌よりは助けられる點がある「古義」に「經ぬらむ」の方で解釋を下しながら、爾計武にても「いづれにてもあるべし」とあるは詳しくない(此の說あまり長いから略する)

第三　らむは未來に係らぬ。

「玉の緒」にある幾十のらむその外自分の見た所では、らむを未來想像に用ゐた例は全くないのである裏から云へば、

(公任が)この女御(詮子)はいつか后に立ち給ふらむと打見入れての給へりけるを(大鏡)

此の殿は御形のありがたく末の世もさるべき人やおはしましがたかるらむとまで見給へりしか(大鏡)

此等は何と說明したら好からうか。不定時と見る說もあるが、少し面白からぬ所もあるし、又愚見の及ばない事もあつてかやうな例が澤山あるとすれば、前說が破れるかも知れないので、伏して大方君子の敎を仰ぐ次第である。(國學院雜誌第十二卷第三號所載)

「らむ」について又

本誌第三號に「助動詞ラムの意義」と題して意見を述べた所、先月發行の國學院内の回覽筆記雜誌「末賣毘支」に折口信夫氏が色々意見を書いて、「ラムが現在以前の動作にかゝらぬといふは面白い樣だが、未來にかゝつて居るのも澤山ある」と色々の例を出された。自分は其の說を讀んで利益も得たから、返答かたゞ〳〵此に書いて前說を補はうと思ふ。

第一に少し修正したいのは、前には「らむが不定時の動詞にかゝるといふのは面白くない心地がする」といつた事である。あれは段々考へて見ると、差支ない、不定時でよろしいのである。何故かといふと、不定時は時に關係なく、動作そのもの丈を代表するのだから、現在動作にかゝるのと同じ關係になるのである。尤もラムが現在想像を表はすが本體といふことは少しも變らぬ。不定時にかゝつたのは本の少々全體の一割もあるまいと思はれる。

次に一般の學者に研究して貰ひたいのは動詞の時である。時の解釋が違つて居ては此の論もつまり出來ぬのである。折口氏の現在でないとして呈出された例の中半分は立派な現在と思はれるので、他の人の爲めにもと次に解釋を試みて見よう。

萬葉五　たらちしの母は目見ずておほゝしくいづち向きてかあがわかるらむ

このラムはイヅチに強くかゝり、ワカルは現在の動作、ドッチヘ向イテ別レヨウゾ、別レルコトデアラウゾ等に近い意味である。

躬恒集　今日暮れて飛鳥の川の川千鳥今いくせをか鳴きわたるらむ

此のイマを未來にかけて見るがよいといふ折口氏の考だが、それは慥かに惡いしかしさういふ考の人もあつたと見えて、一本にイク瀨チカをイクトセカにしたのもある。それがどうしても正しいとなる時は、此のワタルは不定時に變る。「ならむとすらむ」といふやうにあるムトスラムの場合は皆不定時である。

友則集　初時雨ふれば山べぞおもほゆるいづれの方かまづもみづらむ

時雨ふれば紅葉する定だによつて、時雨と同時に紅葉する現在の動作を何方が先にと想像したのである。

人麿　柔膚すらを劒太刀身にそへ寢ねば鳥玉の夜床母荒良無初瀨皇女に上る長歌の一節)

前に「ソヘネネバ」と確定に言つてある所から推しても「アルラム」はアレテキルダラウ位の現在想像に見なければ此の語は解かれぬ。一本に「何禮奈無」としてあるのは惡い。

紫式部日記　讀みしふみなどいひけむもの目にも止めずなりて侍りしに、いよ〳〵かゝることと聞き侍りしかば、いかに人も傳へ聞きて憎むらむと恥しきに、云々

是もドンナニ憎ンデルダラウ位の立派な現在想像である。うつかりすると未來でも分る樣に思

はれようが、それでは筆が死んでしまふ。

忠岑集　水かけを得にける松はいとゞしく波の上にや生ひまさるらむ

水影を得にける松は確定完了である。その生ひまさつて居る所をイトヾシクと言つてラムと想像したのである。次に不定時のは

土佐日記　親やまほるらむしうとめやくふらむ

之を未來にマボリナムとかクヒヌベシと言つて分らうか。此等の時に不定時はあるので、マボルコトデアラウ、クフダラウなどにまづ近いのである。

古今十八　世を捨てゝ山に入る人山にてもなほ憂き時はいづち行くらむ

同　十九　ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそはてはなけきの森となるらめ

前のナホ憂キトキは不定時で、隨つて後の行くらむも不定で、主としてラムはイヅチにかゝる。事實は未來に起るべき事にしろ、語は未來になつて居らぬ。この點はよく考へなければならぬ意味丈ならば「イヅチ行ク」とラムを取つても分るが、ユクは矢張不定。又「イヅチ行カムトスル」とか「イヅチ行カントスラム」としても、スルスラム共に不定時で、未來の動作を表す語はどうしても出て來ない。後のナルラメも專は未來で起るべきだが、さりとて之をナリナムとしたら意味は分つても語は大變違ふであらう。此の點に注意して見ると、ナゲキノ森トナルコトダラウヨ位の意味で未來想像にはならぬことが分る。

躬恒集　秋の夜のあはれはこゝにつきぬれば外の今宵はつきなかるらむ

拾遺十七　世をうみて我がかす糸は七夕の涙の玉の緒とやなるらむ

古今四　秋萩にうらびれをれば足引の山下とよみ鹿の鳴くらむ

此等のラムは皆不定で、ナカラムとかナカリヌベシとか言ひ換へても、それは想像は想像だが未來といふべきものではない(形容詞に時はない)ナリナムは未來だが、意味は分つても面白くない。此のナルラムナクラムを脚結抄流に譯して見ると「ナルコトダラウヅ」「山下トヨミテ鹿ノ鳴クデアラウコトヨ」などゝなるので、「脚結抄」の解は大抵よい樣だ。結局不定時の動作卽事實として想像するより外に、ラムは動作の未來を表すことが出來ぬ。

なほ愚說に誤がありましたなら、どなたにも御指摘下さる樣に厚く願ひます。

(國學院雜誌第十二卷第六號、所載)

「ごとし」の論

一　「ごとし」は助動詞と定むべきか

「ごとし」は祝詞・宣命・記・紀・萬葉の古より明治の今日まで用ゐ馴れたる言葉ながら、其の意義及文法上の位置につきては昔より等閑にせられたり。今まづ文法上の論より言はむ。

本居翁及その流の人には此の言葉を論じたるを知らず。富士谷氏は「あゆひ抄」の十二身の終に收めたる、ともかくも好き思寄なり。されど此に謂はゆる「あゆひ」といふは今の助動詞・てにをは・接尾語を混同したる名なれば、今の代には用ゐがたし。其の後の語學書には取り立てゝ言ふべき者なきが、近く大槻氏に至りて、助動詞・てにをは・接尾語の別を立て、「ごとし」を助動詞の中に收めたるは一段の進歩と謂ふべし。

爾來諸學者に襲用せられ、我も亦久しく此の說に從ひしが、近來漸く其の當否を疑ひ、昨三十九年九月以後は改めて一個獨立の特殊形容詞として之を說くこととしたり。今其の理由を述べて大方の批判を乞ふ。

二　助動詞の二種

助動詞といふ新名目には二種の義あり。一は動詞を助くる者にて、否定・想像・希望・完了・過去等皆動詞に附屬する者、一は助くる動詞の意義にて指定・なりたり・たりと比況・ごとしとなり。而して前者と後者とは所屬其の他此の如く異なるに、等しく助動詞と定むるは、共に獨立詞にあらず、而も活用あるに因ること、是萬人不言の中に默認する所なるべし。此の標準固より捨つべからざれども、こに一考を要することあり。そは凡そ附屬辭は、「てにをは」と助動詞とを問はず、必ず一定の所屬あることなり。

前者卽動詞に附屬する者は論なし後者のナリ・タリは名詞・代名詞等體言に附屬する者にして、其の動詞・形容詞の第四變化に附屬するは連體法の下に體言を省略せる者に附屬するにて、決して動詞・形容詞等の用言に附屬するにあらず。是は口語のダ・デアルなどに比して考ふれば誰しも了解し得べきことなるが、一派の人はナリ・タリを以て獨立詞と立てむとするもあるべし。此に就きては文章論の上より少しく言ふ所なかるべからず。

(イ)　主語　正成は　客語又ハ補語　忠臣　鉸述語　なり
(ロ)　主　正成は　鉸　忠臣なり
(ハ)　正成は　客又ハ補　忠臣に　鉸　あり
(ニ)　正成は　客又は補　忠臣で　鉸　ある

(ホ)正成は　客又ハ補　忠　臣　鉞　だ

(ヘ)正成は　忠臣鉞だ

此の例にて(イ)(ホ)の如く說明する人はナリ・ダを獨立詞と見るなるべし。もしナリ・ダを附屬辭の助動詞と見ながら此の見を立つとせば、我が國語の助動詞は西洋語の助動詞の如き者となりて、國語の性質には適はぬものとなるべし。さりとて又ナリ・ダを獨立詞と見るはニアリ・デアルと混同するものにて、事實上は相違なくとも、言語の上よりは何分にも首肯し難し。事實と言語とは一致することもあれど、必しも然るにはあらず。此の關係を輕んじて事實意義のみを見ては到底言語は解すべからず。故に余は「文の成分は詞或は詞辭相合せる者なり」と定め附屬の辭卽てにをは助動詞等は一成分たること能はざる者とし、前例に於いては(ロ)(ハ)(ニ)(ヘ)の說明法を取る。ナリは遂に獨立詞たること能はじ(タリも之に準ず是に於いてナリ・タリの體言所屬辭たることは定りたるべし。ナリは又動詞第三變化に屬することあり、咏嘆のナリといひて指定のと分つ人多けれど、實は同物なり。(國學院雜誌にて岡澤氏も論ぜられたりきと覺ゆ)

殘れる助動詞「ごとし」の所屬は如何に。或は連體を受け、或は領格を受くること不規則千萬なり。左に見よ。

(イ)年月は　流るゝ　ごとし

(ロ)心　空しき　ごとし

(ハ)花　雪の　ごとし

(ニ)愚　我が　ごとき　者

(ホ)年月　流るゝが　ごとし

(ヘ)心　空しきが　ごとし

(イ)(ロ)は動詞形容詞の連體法に接し、(ハ)(ニ)は名詞・代名詞の領格に接し、(ホ)(ヘ)は連體法にガを挾んで接せり。かくて此の言葉は體言に附屬すといはむか。用言に附屬すといはむか。はた助辭に附屬すといはむか。「てにをは」の互に結合する者はあり、又助動詞に附屬する「てにをは」はあれども、「てにをは」に附屬する助動詞は有るべくもあらず。體言もしくは用言に附屬する助動詞はあれど、兩者に附屬するものは此の外に有るべしとは覺えず。名詞・代名詞に附屬する「てにをは」はあれど、「てにをは」を附して格を表したる名詞・代名詞に附屬する助動詞といふもの有るべきか。動詞形容詞に法あり。法を表す爲に附屬する「てにをは」バ・トモ・ドモは有れど、法に附屬する助動詞有るべきか。國語の助動詞は動詞の如く直說・終止・連體・連用・命令・前提の三法の一もしくは二もしくは三を有して、動詞に附屬する時は全體の法を此の助動詞にて引き受くる事なるに、連體法に附屬する助動詞あるべきか。大槻氏がズ・ム・マシ・ベシ・ラム等を某々法に附屬する者の如く說けるは取らず。それは只第一變化第三變化等の形に附屬せるなり。助動詞の附屬する動詞本體の法は說くべか

らず余は皆之を非認す。

然らば「ごとし」の用法に於いて何等か一貫の理法存せりやといふに、すべて連體詞に接せるを見る。連體法の動詞形容詞は連體詞なり。領格の名詞代名詞も連體詞なり。ホ)ヘ)の例に於いて流るる　空しきは下に體言を省略せる名詞にしてガを添へたる領格名詞の連體詞なり。連體詞の下に接する言葉は必體言ならざるべからざるは國語最要の制約なり。誰か之に對して異言を挾むべき。誠に「ごとし」は體言なり。さては體言の助動詞といふ者あるべきか。助動詞は活用ある者といふにあらずや。然り「ごとし」には活用ありさては體言にして活用ある者あるべきか。ごふまづ之を解決せむ。

三　半體半用の語

體言にして活用ある者あり。オトナは體言なるが「大人シ」とシク活をなす「事々シ」「物シ」「業々シ」等皆此の例なり。アキラカは體言なるが、アキラケシ、アキラカナリとシク活ナリ活を成す。「靜ナリ」「ノドケシ」の類皆是なり。「奇麗」「結構」は體言なるがナリ活をなす以上、皆體言にて活用ある者なれど、熟して形容詞をなせば、純然たる用言の用法にして連體語に接する體言の資格を失す。「夜ノシヅケサ」といふ時はシヅケは夜を敍述せる用言即形容詞なるが、シヅケサといへば體言となる。此の如きを前用後體の詞といふ。其の例極めて多し。「花ヲ見ニ行ク」、「義經頼朝に哀訴ノ事」「深ク心配ハ無用ナリ」の見哀訴心配は上の詞に對して明に動詞即用言なるに、下のニノハに對しては又明に名詞體言なり。「ワレラオモヒ顔ナリ」「大船ヲコギノスヽミニ」など皆然り。一詞體用を兼ぬるは有るべきことなり。然れども他は皆前用後體なるに、此の「ごとし」のみは前體後用なるは、珍中の珍といふべし。そも〳〵又前體と見たるは僻目か。しばらく「ごとし」の意義を釋して之を檢せむ。

四　「ごとし」の意義及語源

「ごとし」は今の口語九州邊にては尙「ゴト」「ゴトアル」など用ゐらるれど、一般には「樣ダ」といふ。文語にも亦「樣なり」といふ。その意義全く相同じ。「樣」はサマにて字音ヤウなるが、本源の名詞たることは言ふに及ばずされど「花雪の樣なり」「年月流るゝ樣なり」と用ゐる時は「樣ナリ」をナリ活形容詞と見るが穩當なり。何となれば此の時は事物の名を表さずして狀態形狀を表せばなり。但し此をも名詞と釋くこと能はざるにあらず。

此の如く見れば「樣ナリ」の「樣」は「ソノ樣」の「樣」を敍述せる者にて、名詞を以て名詞を敍述せる文となるなり。此の釋法極めて正しくして眞なり。されど今の人の腦裡には此の如く精確なる觀念あるにあらずして、只その狀態を言はむとして言ふなれば形容詞と見るが最當れり。此の「樣」は上詞に接する法全く「ごとし」に同じく、前體後用の形容詞なり。さらば「ごとし」のゴトは「樣なり」の「樣」の如く根源は名詞にあるまじきか。

雪の降る事を
が樣に望む

風を引かぬ事を
樣に せよ

かゝる事
樣ならば 早くより 勉强すべかりき

水の流るゝ事
樣に あり

此の諸例を見るに、コトとサマと意義甚近からずや。只コトは事物動作を直指し、サマは其の樣を婉曲に間接に指すにあらずや。コトの明に有樣を表すは左の副詞の例にて知るべし。

長く 雨 ふらず　　美しく 咲けり

長いこと 雨 ふらぬ　　美しいこと 咲いてゐる

速く 走る

速いこと 走る　〔念々如走〕

體言の副詞は此の「〇〇コト」の外にも例多し。而して此の「〇〇コト」は皆狀態を表す。而して漢語の「〇〇如」の「如」が之と一致するは極めて奇なり。「突如」は「突ナコト」なり。「勃如」は「勃ナコト」なり。此は蓋し偶然にはあらじ。

「事」の「コト」が如何にして濁音「ゴト」と成れるか。カマ(蒲)をガマといひ、ヒキ(蟇)をビッキといひ、カヘル(蛙)をガヘルといふ。清音の濁音に變れるは珍らしきことにあらず。而して一歩を進むれば此の「ゴト」も古は「コト」なりし者の如し。

萬葉七　殊放者奥從酒嘗云々
同十三　琴酒者丹於嘗
同十　如是有者何如殖兼山振乃止時裳哭戀良久念者
古今春下　ことならば咲かずやはあらぬ櫻花見る我さへに靜心なし
同戀五　ことならば言の葉さへも消えなゝむ見れば涙のたぎまさりけり

此等の「コトサカバ」「コトナラバ」の「コト」は「如」の意なること「顯注密勘」の說を始として鹿持氏の萬葉古義に殊に精しく說かれたり。如何にも然らでは說き盡ぬるなり。鹿持氏は又允恭紀の「許

等梅涅槃波揶區波梅涅孺」の「コト」も、源氏帚木品定の「こと」が中になのめなるまじき人の後見の方云々」の「コト」をも「如」なりといへり。(詳しくは古義を見よ)それもさもあるべし。是に至りて余は一層「如」の「コト」が「事」の「コト」と同言なるを主張し、更に「異」「殊」「特」の「コト」をも同語なりと言はむとす。

さあ　事だ(異變ナリ)

特に　(事ニ、事トシテ然リ

態と(故意ニ、業ト、專業トシテ)言はず)

獨立詞は　附屬辭と　異なり(事ナリ、事ナキニ非ズ)

極端は相近し。同一根より反對の語を生ずる例は極めて多し。此の三例を見ば、我が言の妄ならざるを知るべし。

五　結論

前節に於いて「ごとし」の「事し」にして「樣なり」と同義なるを悉せり。而して「樣なり」を形容詞とすれば「ごとし」も形容詞なるべし。大槻氏の「別記」に、

「何のごとし」「何がごとく」ナドノ用例ニ據レバ獨立ノ形容詞ナルガ如シ。然レドモ一文ノ冒頭ニ用ヰラレザレバ(語首ノ音モ濁音ナリ)尙助動詞ナルベシ。

と書かれたるは、學に忠實なるものなるが、余は之をナリ・タリに比して、それと同列に置くを欲せず。よし文の冒頭に用ゐられずとするも、そは此の言葉の本來の性質にあらず。「コトナラバ」の例を思ふべし。(漢字に「君子哉若人」とあるも同例なり)(二)に於いて論じたるが如く、助動詞とする時は其の所屬の點に於いて甚しく助動詞の性質を損するを以て、その外に排出せむと欲す。且ナリ・タリに比して文章論上より見むか、

年月は(主)　流るゝ(修又ハ補)　ごとし(鉸)(樣なり)

花(主)　雪(修又ハ補)　の　ごとし(鉸)(樣なり)

と獨立詞に釋するが至當なるを覺ゆ。形容詞には特殊なる者多く、特別に說明せざるべからざる者此の外にも多しとすれば、文法上取扱の便宜も亦失ふ所あらず。其の稍附屬的意義あるは余も十分に認知すれども、助動詞風なりといはむよりは寧接尾語風なりと言ふが妥當なるを思ふ。

雨ガ　降ル　相ダ

人ガ　來ル　筈ナリ

來デハ　ナラヌ　譯ナリ

等の相筈積譯も名詞より出でて形容詞的接尾語的に用ゐらるゝ者にて相類せり。

「ごとし」の特殊なる點は又活用にあり。今初學に之を圖示す。

第一變化	第二變化	第三變化	第四變化	第五變化	第六變化
○	ごと ごとく	ごとし	ごとき	○	○
ごとくならムズバ	ごとくなりキ	ごとくなり	ごとくなる	ごとくなれドバ	ごとくなれ
ごとから（ムバムズ） ごとけ	ごとかりキ	ごとかり	○	○	○

カリ活の第四・五・六變化は用例なかるべし。

余が說は思はず長談義となれり。之を煎じ詰むれば、

「ごとし」は接尾語的に用うる特殊形容詞なり。

となり。（國學院雜誌第十三卷第一號所載）

日本語の動作と狀態

序――あり――す――ず――つ、ぬ、き、けり、めり、べし――主格と賓格、助辭の――能性動詞の目的――狀態的の敍述語の客語

序

「動作と狀態」といふと、動詞と形容詞の論に思はれるかも知らんが問題はなか〳〵大きくて廣い。外國の文では是がどんな關係になつて居るか、詳しいことは自分には分らんが、日本の語は特別に此の事が大切である。是から論ずるのはたゞ八ヶ條の事であるが、此の方面から十分研究したらば尙面白い事實が擧つて來るかも知れん。自分が此の事に氣がついてから、十年ばかり、之を解剖刀として日本語をためして居るが、隨分切れ味が善い樣に思はれる。で、一般に使用したならばと。

一　あり

作用言と形狀言の論は維新前から相應にあつたことで、「あり」を作用言とするのは惡い。むしろ形

狀言に入れろ」といふ說は道理のあることであるけれども詞の分類は單に性質一方でされるものではない。形態の關係も見て便利に取扱はねばならんものだから、存在を表すこのありを動詞に入れて置いたとて、あながち不合理ともいはれない。一體ありは動作的の意もあり、狀態的の意もある。

あの　人は　金が　ある

鴨には　水搔が　ある

などは無論狀態的の書方であるが、しかし其の中に動作的の意もないではない。「金をもつ」「蹼をもつ」といふやうに動作的にもいはれる。それは丁度漢字の有をありともつとも訓ずる樣な譯である。此のありと同類の良行變格の居り侍り異なりなども餘程早くから四段活に誤られてをるのは皆動作的の意に近く人が解釋するから、自然にさうなつたものかと思はれる。良行變格に再轉して全現在を現すのは四段活と佐行變格とに限つてをるのに、普通の人は　居れり　侍れり　異なれり　などともいひ相に思ふ。それは多少道理のある事と自分は思ふ。現に、僧正遍昭の

名にめでゝをれるばかりぞ女郎花我おちにきと人に語るな

のをれるは「折れるでは無くて居れるだ」といふ學者もある位である。狀態的の方はいふまでもない。形容詞と結合して　よかり　よからず　よかれど　などいふのは皆此の爲で、又久活之久活の第五變化の　けれも　あれ　の結合卽　けれの變形に相違あるまいと思はれる。

二　す

佐行變格の　す　は他性の動詞で最動作的の語であるのに、不思議にその意味が消えてしまつて狀態的に用ゐられることが多い。

さすれば＝さあれば

而して＝而ありて

さうすると＝さうあると

忙しくあり風も引いて居りするから行かん＝……をりだから

むけに弱るやうにし給ふ＝弱るやうなりの敬語

皎々として＝皎々とありて

助辭の　して　は本來は動詞だが、ありて　を强める爲に用ゐられて、そして其の意味が消えて助辭の樣になつたのである。

山高くして＝高くありて

我が身ひとつは元の身にして＝身にありて

土佐の國にして死にたり＝國にありて

す　は又　ありの樣に　もつ　といふ意になることがある。そして第二變化に　て　を添へて

矢張助辭のやうに。

手して書く――手をもちて

人して云ひ遣る――人をもちて

「一人して行く」「三人して動かす」などのは　行く　動す　の動作を前に言つたものだらう。

もつ　とは解かれない。使性の動詞にかゝる名詞につく助辭　をして　は　もちて　の意味で

し　が強いから　を　と受けたものであらう。

人をして之を殺さしむ――人をもちて

す　の動作的の意味が失せて只語を強める爲に使はれることがある

夢と知りせばさめざらましを

此の　せば　に過去の意味があるやうに說く人もあるけれども、自分は取らない。口語の「知りは

せん」「しはせん」などと同じに、居體言の下を佐變で受けたものである。

余を頑なりとや誹らむずらむ

彼は敵にてもあらむずらむ

これは「風吹かむとす」「遂に雪とも降らむとすらむ」など始は實辭だつたのが、つまり其の意味が

消えて强めの語になつたのである。

す　といふ他性動作的なのを　あり　なる　など自性狀態的に言ふことがある

出御あり　出御なる――出御せらる

下向あり　下向なる――下向せらる

これは敬語であるが、自然にさうある、さうなる樣に狀態的に言つたもので、せらる　の被性が

能性となり又敬性となるのも、すよりは遙に狀態的なのである。

三　ず

助動詞の動詞的か形容詞的かを詮議することは普通の文法には入らんことだが、詳しくすること

とには矢張一應は調べて見なければならん。其の中で曖昧なのはこの　ず　である。ずぬねの

變化の模樣は動詞的だが、第三變化よりも第四變化より

○　ず（バンテ シテ ケリ）　ず　ぬ　ね

ざら（バ ム）　ざり（キ ケリ）　ざり　ざる（メリ ラム バシ ラシ）　ざれ

も想像の助動詞に續かない。して　といふ助辭は前に言つた樣に動詞のものだから形容詞の

副詞法を承けるので動詞からは續かない法だのに、ず　は　して　に續く。そんなら狀態的かと

いふに、古文には「若かずけり」など第二變化から　けり　を承けてをる所は動詞的であるが、それ

は特別の例であつて、ないと打消す語だから矢張狀態的の語で、形容詞の樣に副詞法となつてば

て　して　など承け、又は副詞句を造るものと解釋するが至當だらう。

四　つ、ぬ、き、けり、めり、べし

つきめりは動作的で、ぬけりべしは狀態的である。これは日本の文語で一番むづかしい助動詞だから、少し丁寧に說明して見よう。まづ

つとぬは時が少し違ひはせんかといふ疑もあつて、多少はさうかとも思はれるが、矢張時は同じである。之を簡單に說くと、動作的と狀態的の一言で濟ませられる。尙いへば、つは急に强く、ぬは緩に弱いつは殊更にする意があり、ぬは自然になる意がある。之を自他で區別しても大抵は當るけれども、自他は動詞の固有の性であつて動かないのに、つぬは其の時のいひ方次第で自他兩方に附くから、どうしても其のいひ方かき方について動作的狀態的と區別せねばならぬ。

日高くさし昇りぬ（傍カラ見ル狀態）

けはしき山を登りつ（ソノ方カライフ動作）

時鳥鳴きつる方（動作ヲ直ニ）

去年は立夏の日より鳴きぬ（他カラ記載スル狀態的）

殿におはしまして泣音に臥し暮し給ひつ（フシ暮シタ人ノ動作ノ上カラつトイフ）

浮きぬ沈みぬ漂ふ（浮ク沈ムヲ自然ノ狀態ト見テ）

立ちつ居つ待つ（立ツ居リヲ動作的ニ）

立ちぬ居ぬおよびさしなど（コレハ狀態的ニイウタノミ）

夜明けぬ（アタリマヘ）

夜明けつる程は云々（動作的）

つぬにべしをつけて見ると又よく分るつべしはされる意、ぬべしはし相な意（したい位にもなる）

見つべし（見ラレル）　謂ひつべし（イハレル、イツテヨロシイ）

雨降りぬべし（フリサウナ）　殆動きぬべし（動キサウナ）

讀みつべくば早よめ（ヨマレルナラ）

てばなばてむなむてましなましてけりにけりなど皆これでよく說明される。尤日本語も近來は此の全現在のつぬの所をたりで表し、又は助動詞を用ゐないで、書く　書くべし　書かば　書かまし　など粗末にいふ事になつたから、此の區別が大變むづかしい自分の書いたものゝ終に「誰某識しぬ」など書くのも無理はない樣なものゝ、こんな時にはどうしても「識しつ」でなければ通らんのである。源氏の胡蝶の卷に詞と歌とでつぬの用る方がある。

きのふは音に泣きぬべくこそは「わが宿の梅のほづえに鶯のねになきつべき戀もするかな」

鶯の鳴いたのは動作的になきつであるそれを受けて泣かれる程の戀をすることぢやさてその樣に昨日は泣き相であつたといふので、このぬべくつべきがはつきりと分る。それから

き　けり

日本語には單の敍述文と對話文とあつて、對話の方は直接に話すもの、敍述の方は事柄として他から記載するものである。それで過去の時などにも大きに關係がある。物語などの地の文は敍述で詞（コトバ）は對話、直接の對話體では動作的になつてきを用ゐる、間接の敍述體には狀態的となつてきありの樣な意味のけりを用ゐる。つぬも矢張さうで、つは對話に多く、ぬは敍事に多い樣な傾もある。で、大抵の歴史などは此の間接狀態的の敍述法だが、古事記、大鏡などは對話式で、きで持ち切つてをる樣子がある。源氏物語の始に

すぐれて時めき給ふありけり

とあるのは物語の地の正則だが、又時には

始よりおしなべてのうへ宮仕し給ふべき際にはあらざりき

とやうに、此の文を對話式に代へてをることもある。これは前後の語勢から起つた變則である。それでけりの方には繼續態の意味もあり、轉じては全現在にも用ゐられ、感歎辭にもなることがある。それは皆動作的でないからで、きしかには決してそんなことはない。

君が名も我が名も立てじ難波なる見つともいふなあひきともいはじ

夜舟ひくよどの舟人はからるな招くは岸の尾花なりけり（景樹）

さをしかよ招く尾花にはからるなねらふさつをの弓末見ゆなり（頓阿）

此等は皆對話的で始のは全現在のつと過去のきとでよく整つてをるが、景樹のけりは全く無意味で語にならない。是は後の歌を下手に燒き直したので、つまり景樹などはきけりの別などいふことにはちつとも頓着が無かつたのである。末摘花に

故常陸の親王のすゑにまうけていみじうかしづき給ひし御むすめ心細くて殘り居給ひたるをことの序にかたり聞えければ

地の過去のけれ、それに對する現在のたる、けれに對するしとよく揃つてをる。次に　めり　べし、めりは見エアリの約など昔からいつてをるが、自分の考では、此の兩の語の原はべらべみなどのべでそれが狀態的になると久活に活き、動作的存在的になるとべがめとなつて良變にめりと活くと說く方が分りよいやうに思ふ。それで　つ　ぬ　との接續を見ると參考になることである。それは動作的のめりには動作的のつが續いてめりつるともいふが、狀態的のぬがつゞいてめりぬるといつた例がないことである。そのやうにたりもつは普通につゞくが、たりぬといふことは減多にない。是で助動詞の動作的狀態的といふことかざつと分つたらうと思ふ。

五　主格と賓格　助辭「の」

がは主格に接き、をは賓格につく、此の點から見ると、區別が如何にもはつきりして居て少しも紛れない樣だが、少し奥にはひつて見ると、案外千萬「てにをは」ばかりではなか〳〵解けない。

我は酒を好む　　酒が好きなり
酒は嫌なり　　酒の嫌になる藥
酒を欲す(要す)　　酒が欲し(入る)
餅が食ひたい　　ふぐは食ひたし命は惜し(命を惜む)
友を訪はばや　　國害を除かなむ

此の十の例で賓格な筈の語ががともものとも變じて居るが、それををに更へることは出來ない。何故かといふに、がのついた目的語の下は必形容詞又は狀態的の語で、をの下は必動作的の動詞に限るからで、して見ると同じ目的語でも狀態的の語の上にある時は賓格とはいはれない。賓格は動詞の處置を受ける格であるのに、形容詞は物を處分する力がないから、無論又主格ではない。して見ると副格(第三格に)と極つてしまふ。即がは主格の外に狀態的の語の目的を表して副格となるのである。こゝに又一の特例がある。「たし」といふ助動詞のついた動詞は結合した上で、動作的にも狀態的にも、言ふ人の心持次第で變る。

「餅を食ひたい」は「食ひ」を重く取り
「御話をしたい」はしを直接に「御話を」に續け

たもので、「食ひたい」「したい」を結びつけて「餅」「御話」を承けると「が」に變るのである。これは日本語にとつて特別な性質で、極大事なことであるのに、是まであまり人の論じて居ないのは、漢文直

譯體の文章に此の樣な例の少いのと、今一は西洋語の形容詞との區別がよく分らんでをつた爲だらう。

のといふ助辭が動詞の目的語に添ふことがある例へば保曆間記に

諫言の用るす　　謀叛の起し
禁中の人々隨分朝恩の蒙る程に
先陣の仕る　　鳳輦のさしよせ
鎭西の者共義經に相從ふべき旨院宣の給はり候はゞやと申されければ
三十餘年の經て今始めて見給ふ

三河物語に

御恩之報ぜんこと　　(各鑓が合)
後之世に御譜代之御主樣之しらせん爲に

謠曲狂言などに

同道の致さう　　酒宴の設けて
興行師の口上などに
藝當な致させます　　御機嫌な伺ひます

などゝある「の」は「が」と同じで轉じては「な」ともいはれるかやうな語は理窟の上から見ると、一寸

をかしい間違であり相にも思はれるが、しかし日本語では其の時の語氣次第で言はれんことも
ないのであるだから、是も一の法として說明しなければならぬ。
中古文には又少し變つた「の」がある。源氏物語に

夕貌　この扇の尋ぬべき故ありて見ゆるを
乙女　この君のきのふけふのちごと思ひしを
同　大殿の太郎君の試み給ふべき故なめり
若菜　忍びたる御ありきのいかゞと思ひ憚りてなん

などあるのは今の文ではまづ「を」と書く所だ。尤第一の「扇の」は「見ゆる」にかゝるのだから、「を」で
はあるまいとも謂はれるが、矢張「尋ぬ」にも餘程密接になつて居る所は「を」の格なのである。

菊を植ゑたる畑　菊の植ゑたる畑（菊の植ゑられたる畑）

これでも今文は第一の「を」の方が多いけれども、中古文などには第二の「の」も隨分多くある。平治
物語に

科なき母の命の失はんことの悲しさ

なども皆此の例で、下を狀態的に言ひなした心である。
又此の「の」の反對に

あるじをよそなる振舞

足を空なり
能をつかんとする人
上を下にて惑ひあへり

などいふのは「主人を外にする」「足を空にす」「能をつけむ」「上を下として」と續く其の動作的の語
を狀態的に變じながら、目的の語をば元の儘に殘して置いて意味を持たせる修辭法である。此の
修辭法からして自他混合の誤謬と間違へられ易いことが往々ある。修辭上自然に有るべき法だ
から、文法でも誤謬とはされない。

日本歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける

これを間違だといふ人もあるけれども、それでは面白い日本文は出來まいかと思はれる。「自分は
「人の心を種にて」といふ場合をも認めるから。

六　能性動詞の目的

能性（可能勢相）の動詞の目的語にはがのはもぞやかなんこそなどのつくのが本體である。中古位
までの文には「を」と承けた例がない。今の口語では稀に「本を讀まれない」とか「酒を飲まれない」な
どともいふが、それは「讀む」「飲む」といふ他性の動詞を主にしてそれに引かれるので、能性動詞の
方からいふと宜しくないがやうな法は今でも三分通位しかあるまい。能性は直接に動作するの

ではなく、たゞその事が出來るといふのを現すのだから、畢竟は狀態的の意味に歸するからであらう

亡き人の事をしのびて泣く
亡き人の事のしのばれて泣く

本を讀む　本讀まる　本が讀める

噂を聞く　噂が聞える(能性自然)

君は鳥を見る　我は近視眼ゆゑ鳥見えず(能性)

主義を賣ることを得ず　主義は賣られず

この「を得」といふ法は漢文の直譯で日本語法には根柢から背いてをる。口語で「が出來る」といふのが正しい日本語である。こゝの「得」は動詞でなく能性を現す助動詞だが、本來の語法では無く只直譯した丈の事である。

被性(受身)の動詞も多少狀態的になることがあるので、その場合には目的語の「を」が變るけれどもそれは少い。

私は一方にのみ氣がとられた

人の首を斬られたる場所

鳥が人に羽を討たる

七　狀態的の敍述語の客語

先年「帝國文學」などに總主論といふことが喧しく起つた事があつた。御存じの方も有らうが、畢竟「日本の文には一の敍述語(說明語)に對して二つの主語があることがある」といふ面白い議論であつたのだが、自分はどうも承知が出來ん。謂はゆる總主小主に關係ある二三の文章を解剖して見よう。

象は身體大なり

支那は國土廣し

徂徠論語徵を著して其の名大に顯る

こんな文で、「身體」「國土」「其の名」は「大なり」「廣し」「顯る」の主語の樣にも一寸見える。さうすれば「象」「支那」「徂徠」を總主とか本主とか名を付けなければならぬことになるけれども並立しない二の主に對して敍述態が一であるといふは誠に不理窟なこと。そこでこんな文の敍述態の性質を吟味して見ると、多くは形容詞で、動詞なのもあるが、それは動作的なのではなくて皆狀態的の者ばかりである。それを言ひ方を變へて動作的にして見ると、「第五」の所で言つた樣に皆客語の形になる。

大に其の名を顯す

梅の花は香あり　　香をもつ
君は官吏に適す　　官吏がよし
金剛石も磨かずば玉の光は添はざらん　　光を添へ
人も學びて後にこそ誠の德はあらはるれ　　德を顯せ

かうして見ると、下の敍述語に對する主語でないことが分る。誠の主語は決して是ばかりの言ひ方のちがひで變るものではない。「徂徠を顯す」とか「金剛石を添ふ」など言はれんので分る。此等は皆客語である。精密にいへば補足語になる場合もある。そして敍述語と統合して一の敍述部を作るので、本當の主語に對しては小主といふやうな關係は無く、全く客語の地位に立つものである。

この方針で例の文を解いて見よう。

主 客 敍 客 敍
日本は山水秀麗に氣候溫和なり
敍述部　敍述部

主 客 敍 客 敍
余は學問淺く才疎なり

修 主 客 敍 客 敍
主部
維新の元勳は西鄕が第一にて木戸が第二なり（西鄕を第一とし木戸を第二とす）

主 客 敍 客 敍
日本人は髪黑く皮膚黃ばめり

客 敍 客 敍
敍部 主
日長き春は樂し（余は）――余は日長き春を樂む
修 客

客 客 主 敍
君に二心わがあらめやも（二心を有たむやも）
敍部

主 客 敍 客 修 敍
（余は憂しと見し世ぞ今は戀しき（……世を戀ふ）
修

主 客 敍
私は金が無い（金を持たず）

主 客 敍 客 敍
（余は月見れば物ぞ悲しき（物を悲しく思ふ）
修前提句

悲しいとか、嬉しいとか、歎かはしいとか、をかしいとかいふ樣なことは皆人の感情を表したことだから、その主語は必ず人に歸する譯合、物は客語に立つのである。「が」や「は」などの助辭にのみ拘ると本體が分らなくなる。外にむづかしいこともあるが、まづ大體こんな風に說明したらどんなものだらう。（國學院雜誌第七卷第四號所載）

國語に特有な文の三體

文法を文法學上より別けると、組織の上では單文・複文・重文となり、性質の方では敍述文・疑問文・命令文・感歎文となる。又是を修辭學の方から見ると、記事文・敍事文・議論文・解釋文となる。此の方法は大抵凡べての國語に適用される方法であるが、それは大體一般の區別であつて、尙立ち入つて見たならば、それ〴〵の國語によつて增減すべき區別方法が少くあるまいと思はれる。

今文法學の上より我が國語を觀察して見るに、前の組織性質の二方面七種の文の外に、なほ注意しなければならぬ二方面の事がある。一は敬語卽崇敬體で、他は記錄體と對話體とである。尤どんな國語でも全く敬語の無いといふのはない。皆多少は有るに相違ないけれども、日本語の樣に複雜なのは殆無い。記錄體對話體でも其の通で、語氣に相違のある事は明であるけれども、日本語の樣に微妙なのは是亦類が少からうして見れば、此の二方面三體の文を研究する事は、國語の爲にはもとより、世界の言語の學問の爲にも有益で趣味のある事であらう。

第一　崇敬語

敍述・疑問・命令等の文に平語なのと崇敬體なのとある。此の崇敬體を性質によつて別けると、

一　尊他　尊敬すべき人の身體・所有物件・動作・狀態等を敬ふ。

御顏うるはしく笑はせ給ふ

御病氣御宣敷入らせられ候

御立派なる御帽子　善き御家來

二　自卑　他を崇敬するにつけて、自己の身體・所有物件・動作等を謙り卑む。

愚父先年死去致し候

明日參上仕るべく候

三　關係崇敬　他を處分し又は直接に他に關係する自己の動作を謙る。

御主人の難儀を御助け申す

天長節を祝ひ奉る

四　一般崇敬　話しかける人又は聽く人を敬ふにつけて、一般の動作を丁寧にいふ。是は自卑より轉じたるもので對話體にのみある近古よりの語法である。

昨日御出なされ候節云々

雨降り候はゞ不參可致候

御飯を食べ候へ

此の四種類になる。之をまた言語の上から見ると、崇敬體を形成するに、一個そのまゝの敬語があ

一　一個そのまゝの敬語

甲　名詞　尊他

方「奥方」「此の方」など用ゐる直接に人を指さないで、其の人の居る方向をいふので敬語となる。

殿　是も其の人の居る場所を指す。「何某官」とか「北堂」などいふのは皆此の類である。

乙　代名詞

（イ）尊他

なんぢ　汝貴の意味で、詳しくいへばムチは接尾語であるが、今殆一個の語になつてゐる。そして尊他の意味も減じて只なといふと同じ位になつた。

あなた　は彼方で、方向の遠稱代名詞であるが、轉じて人代名詞の二人稱となつた。「其方」「其の方」なども敬語である譯だが、今は一般に反對に他を卑む意味に用ゐられる。「そこ」「そこ許」なども同樣。

（ロ）自卑

私　公に對して、名詞より轉じたもの。

僕　君に對して。

「此の方」などは威張る意味に聞え、「我が輩」「我等」など複數にいへば是も同輩以下に對する語となる。

丙　動詞

（イ）尊他

宣る　仰す　給ふ　下す　います　おはす　おほす　しろす　きこす　御座る　使ふ

「仰す」は「命す」の轉。「召す」は「御覽なさる」の義。

（ロ）自卑

申す　奉る　上げる　頂く　給はる　侍り　候ふ　致す　仕る　仕へる　參る

「する」を「致す」といふは、「至る」の他動で、ある點から見ると、特に意を用ゐてする意味であらう。

「仕へる」は「使はる」の意味「つかうまつる」は「仕へ奉る」といふ關係崇敬の轉じたのであらう。

（ハ）一般崇敬

ます　御座る　頂く　たべる　侍り　候ふ　致す　仕る　參る　申す

自卑の語の一般崇敬となるのはどういふ譯であるかといふに、是は聽手を尊敬する點から、一般の事物を自己と同じ待遇にし、聽手を極めて權力のある樣に言ひ做したものでもあらうか例へば

上から下さつた御菓子を頂戴する(又、たべる)

といふ文は「それを頂戴して食ふ」意味だから、「給はる」とも「食べる」とも言つて差支ない譯だが、自分の力で稼いで得た「飯を食ふ」のに、

御飯を頂く(たべる)

といふのは、尊敬せんでよい所を尊敬する譯合になつて甚可笑しい。けれども病氣の見舞を受けた時に何の世話にもならぬ人に向つてでも、

御蔭で大きに心ようございます

など、御威光を此方から聽手に有たせてやる樣な事もあつて見れば、「自分の飯」も「御飯」とし、「食ふ」ことを「たべる」(給)とされない譯でもない。木石などの「ある」をも「侍り」「候ふ」といひて聽手をえらものにし、「どうして」を「どう致しまして」「どう仕りまして」といひ、世間が勝手に「いふ」事を聽手に「申さ」せるなど多少解釋が出來る。それから尙又考へると、今でも田舍者などは敬語の尊他・自卑の區別の分らぬ者があつて、敬語はたゞ一般に語遣を丁寧にする譯のものだと思ひこんで居るものが多い樣に、自己の動作でない事をもその積にしてやつて退ける樣な事もまづ想像出來ぬでもない。此の方から見ると、尊他を一般崇敬に轉ずる心持が分る樣である。「ます」は「います」で「御座る」「入らつしやる」と同じに「在」「居」の尊他崇敬であるのを自卑の「候」「侍り」と同じに見て、

是は筆で御座る(入ラッシャル)

など、いふ實は不都合千萬の語法である。

二　助動詞

(甲)　尊他

るらる(下二段活)　す・さす(同上)　す(四段活)　しむ　給ふ　あり　なる　なさる(下二段四段)

めす　ます等

(イ)　る　らる

「讀まる」「見らる」が何故に敬語となるか。元來此の助動詞には外に被性受身)と能性との意味があるのであるが、何方が根本義であらうかといふに、自分は被性が第一根本義だと思ふのである。其の「他からせられる」動作は「我自身がする」のでないから、自身の力の足不足は措いて、慥に出來る動作と認定してよい。そこで可能の意味が第二に起つて來るさてその可能には自然にさうなる樣な意味もあるので「どうしてもさう思はれる」「その深切に泣かる」など、自然的不能、不能的意味が起る。一體貴人は自分で身を勞して事をすることはない方の者だから、「する」といふ故意特別他動的のことは失敬になり、此の自然的能性が其の代になる樣になつたものだらう。是は臆測の嫌があるかも知らんが、あまり大した違もあるまいと思はれる。

此の敬語は上代にはなかつたので、源氏物語中にも二つか三つかしか見えないそれが段々盛に

なつて來て、最普通の敬語であつたのが、近來は又「ナサル」といふ語に壓倒される樣な姿である。

(ロ) す　さす

是は下に「らる」又は「給ふ」を添へて用ゐる。元來此の助動詞は使性(使役相)の本義であるが、前にも言つた通、貴人は人に事をさせて自分はせぬのが當り前であるから、かやうに轉じられる譯と見える。

(ハ) す

是は奈良時代の四段活の敬語である。今でも方言には「先生が本を讀ました」「字を書かした」などと用ゐて居る。どういふ意味で是が尊他の語になるかといふに、矢張下二段と同じに使性より轉じたものであらう。中古文を標準とした今の文法は使性の助動詞は佐行下二段と「しむ」との二つと立てるが、その以前はそればかりでは無かつた例へば動くといふ自動詞が、他動詞動す(ウゴカ)と佐行四段になるが、その他動といふのは使性から轉じたもので、着せる見せる似せるなども皆使性の意味は有つて居るのである。なほいへば驚す　活す　習す　令溺(スオボラ)　令亂(スレム)など此の例である萬葉十四に

なせの子やとりの岡路なかたをれ安乎禰思奈久與いづくまでに　とある「アヲネシナクヨ」は「吾を不令寢」で今の語の「寢せなく」であるから、古代にはさ行四段活の使性があつたといふ事は想像說としてもまづ動かない方であらうと思はれる。前に擧げた「おほす」「きこす」なども實は此

の使用より轉じたのであるが、その轉活の形式が普通の例にはまらないから一個の語として置いた譯である。さて此の佐行四段活の使性は長い間中絕して居て、近來は又下一段活の代に隨分多く用ゐられる樣になつて來た。

(ニ) しむ

常に「給ふ」を下につけること「させ給ふ」と同じである。此の語鎌倉前後には多く用ゐたが、その外には用例多くはない。古訓古事記に

令謁　マヲサシメタマフ

大鏡に

(道眞、時平)兵に世の政をせしめ給ひし間

など。

(ホ) あり　なる

漢字音の動詞の語尾として敬意があるそれはするといふよりは自然狀態的だからであらう。

御嘉納あり　出御成る　行幸成る

近代の語では「に」を添へる。

御出になる　御讀になる

(ヘ) なさる

「なす」が良行下二段の助動詞を添へた語で、「する」の尊他となる是は極新しい語だらうと思ふのに、後撰集に、枇杷左大臣の歌に(大和物語にも)

ならの葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟りなさるな

此の頃からあつた語か、まだ類例が見つからん。それから此の語は下二段活の語であるが、近來は四段活にも活用する。

(ト) めす

是は見るの尊他で「物す」などの樣に色々なことに用ゐられる「知しめす」「聞しめす」など。

(チ) ます

「來ませ吾が背子」「大君の敷きます國」「生みませる御子」など。兼盛の子日行幸和歌の序に、

世の中も樂しければ今のみゆきはありますなり

とあるは珍しい使樣である。

(乙) 自卑

候ふ　侍り　給ふ(下二段)　しむ

(イ) 「給ふ」の下二段活が自卑になるはどういふ爲か試に言へば「使ふ」が「仕へる」となる樣な譯であらうか。尤此の語は平安朝ばかりで後には多く用ゐない。此の「給ふ」の用法にひとつ特別がある。それは熟語の動詞にそふ時は其の間を割つて入ることである。

桐壺　身づからはえなん思ひ給へ立つまじき

落窪　思う給へ忍びつれど

又自卑のにも四段活と思はれる例が少なからずある。此は本の誤とのみもいはれない。當時も混同して使つたものであらう。

萬十八　みちのくの小田なる山に黄金ありと麻宇之。多。麻。弊。禮。

出雲國造、初賀詞　恐美恐美毛申。賜。久。

難後拾遺序　オノレ人に讀ませて聞き給。へれ。ば。

此の外物語類にその例が多くある。

(ロ) しむ

候文などに

一筆令。啓上候

令。參內之處

など多くあるが、今は用ゐない。

丙　關係崇敬

奉る　まつる　參らす　申す

(イ) 「參らす」は「參る」の使性だが、此方の動作を他に受けさせる意味でもあらうか。

(ロ)「申す」は口でいふ事だが、外の事も之に準じていふのであらう

丁　一般崇敬

侍り　候ふ　ます　御座る

(イ)「ます」は「申す」の轉じたのであらう。古くは「ござり申す」などと用ゐたのである。さて此方に用ゐてより活用が佐行變格に代つた。

凱陣八島　奥様へ御取次頼みません

小栗判官　元の山雀かへしません

「ませう」を「ません」といつた時代もあるのであらう。珍らしい例の樣である。それから動詞の外、接續詞や副詞句として用ゐられる語にも附くのは煩はしい樣に思はれるが、元が動詞だから有るべき譯でもある。

御當地に於きまして

御蔭を以ちまして

左樣に御座りますれば

三　助辭

尊他　に

敬語に關係ある助辭はにであるには元來場所を示すのであるが、敬語の場合には主格となる。

御尊父樣にも御變御座なく候哉

貴君には此頃御旅行なされ候由

是は前にもあつた樣に、人を直接に指さないで其の場所を指すといふ意味合から自然に「に」が挿つたものであらう。

四　接頭語

(甲)　尊他

み　おほ　おほみ　おほん　おん　お(おみ)　御大賢貴等

(イ)　名詞所屬　此等の接頭語はすべて名詞格の語につく。その中でみとおほとが合語になつておほみおほんおんと約り、結局おとなる。おみは「大御」の意で漢字の御を二つ重ねて「御御」といふのではないどうかすると、そんな解釋をして可笑しい語だなどゝ言ふ人がある樣だが、それは却つて間違である。　おみ帶　おみ足　おみお汁など普通「お」とのみ言つても濟み相な所を「大御」といふのは敬語が過ぎる樣にも思はれるが尙考へて見ると、お帶　おおつけ　などはおが重つて語路が悪い、お足は錢に混ずるから、自然淘汰でおみの方を用ゐる樣になつたものであらう。

「御」は元來漢字の意味では天子の動作に添へる接頭尾語であるが、日本のみに當る漢字は外に

ないから之を用ゐると、それが總べての尊地の敬語となつて御の字は何にも添へられる樣になつて、その本義は今は毎年一月の御歌會に「御製」とあるのや、又は接尾語の出御入御寢御などいふ場合にのみ殘つて居る。その外大賢貴等は美稱より轉じて崇敬となつた支那仕込のものである。

(ロ) 動詞所屬　みお御などは動詞その他形容詞などにも添ふ樣に見ぇる事がある。

御立派なる御屋敷　御尤なる仰

等は形容詞に附いたのに相違ないが、尙立派尤など體の語についたものとして說明が出來るしかし

御よろしい　御めでたい

等は用言についたものといふより外に仕方がない。是は近代の語法としてよろしい。

御出で下さる　御覽なさる

御讀みなる　御習ひになる

等は敬語に出來あがつた上から見ると、動詞所屬とも見ぇるが、しかしよく調べて見れば、其の下の出で覽讀み習ひなどはいづれも名詞になつて居るから、是は矢張名詞所屬と立てゝ置く方がよい。すべて動詞の敬相は中古までも助動詞で現すのが本則であつたので、助動詞の(甲)(イ)(ロ)(ハ)に說いた樣に、今でも自分の鄕里(莊內)などでは「お……なさる」といふ語法は用ゐない。是から見ても動詞に接頭語の敬語が附くといふ事は極めて變則と思ふ。ところが奈良時代の古い所にみの動詞についた例のあるのはどういふものであらう。

古事記上　於是伊邪那岐命拔所御佩之十拳劍斬其子迦具土神之頸云々

之を古事記傳にはミハカセルと訓じて「さてかく川語にも御といふこと古は記中に御寢坐、萬葉に御立　など猶多し」と解いてあるが、自分は直に贊成は出來ぬ。何故かといへば所佩はハケルでその敬語所御佩はハカセルと訓ずべき譯で、現に自分の見た古い本にはハカセルと訓じてある。それから御寢御立とあるはミネ、ミタチとやうに直譯せねばならぬ譯はないから、此の訓はネサシマスともタ、スとも言はれる。或は其の方が正しからうと思はれる。鹿持雅澄氏も矢張此の本居說で、

萬葉二　御立爲之島乎見時庭多泉流涙止曾金鶴

同十九　船騰毛爾御立座而

仁德紀　爾天皇御立其大后所坐殿戶歌曰

などをミタ、シ、ミタ、シマシテミタ、シテと訓じて居るが、假名書でないから證據にはならぬ。タ、セリシタ、シマシテタ、シテと訓じても差支はないたゞひとつ

萬葉五　帶姬神の尊の魚釣らすと美多多志世利斯石を誰見き

此は假名書で「御立たしせりし」とあるが「たゝし」は佐行四段活の第二變化名詞法であるから、是も動詞に附いた例にはならぬ。此の外に古人が動詞の上にみをつけて訓じたものも皆此の例で

ある質に疑はしい一の問題として尙研究したいと思ふ。

(乙) 自卑

愚　野　小など。罷

此等はすべて字音の語に附いて愚父野生小宅など用ゐてすべて名詞所屬、「愚考致し候」なども尙體言所屬に相違ない罷は自卑の動詞の轉じて接頭語となつたものだから、無論動詞につく。

(丙) 關係崇敬

お　御

是は(甲)と同じに名詞所屬である。

小生より御返事御通知御誘申すべく候

御心配申し候

御祝まゐらす

「敎へ奉る」「導き申す」など接頭語のない時は動詞であるが、接頭語が附くと體言の格になることは容易に分る此の接頭も近代の語法である。

(丁) 一般崇敬

差　相　御

(イ) 動詞所屬　さし　あひは動詞の轉じたもので、無論名詞には附けられぬ。一體此等は敬意などのある語ではないけれども、語に重みを附ける爲に用ゐ出したもので、それから嚴格な語となり一般崇敬ともなるのである。

(ロ) 名詞所屬　御飯　おまゝ　おそば　お味噌　お醬油　お天氣　御粗末な物等、此等は尊他から轉じたもの。

五　接尾語

(甲) 尊他卽敬稱

命　殿　樣　君　先生　御前　前　上　御　き　陛下　殿下　閣下　足下

いづれも名詞所屬である。

命は御言で御事に當てた文字、尊と書くのは其の意味から御事に當てたのである。是は通例三人稱に用ゐるが、「汝命」又は「汝が命」略しては命命達等二人稱の代名詞にも用ゐる。それから延いては三人稱の代名詞にもなる。

殿　は貴人の居處を指す所から轉じて接尾語となつた者、平安時代より用ゐ初め今も消息文に殘つて居るが、口語にはお三の專有となつて「ドン」と轉じてをる軍人社會には今も口語に使用してをるのは、威嚴を保つ爲に一般の樣と區別したのであらうが、隨分耳だつ。

樣　は方角をいふ所から人を直接に指さないといふので敬語となつたものだが、殿　よりは

新しくまづ室町時代よりの語であらう轉じてはサンとなり、チヤマ　チヤン　チヤ等となる。殿と合しては殿樣となり代名詞狀に用ゐられる殿が獨立して用ゐられる樣に樣も名詞を異にすることはあるが、普通ではない。東京の下等な語にチヤンといふのはトツチヤンの上略で、某樣を樣といふと同じである。

君　先生　は名詞より轉じ、御前　前　は其の左右を指すので常盤御前　玉藻の前　等用ゐ、父上　兄上　奏の上　などの上は上位の人の意味、父御　妹御等は接頭語の下に用ゐられたもの、きはきみの意味で、犬き　あてき　兄きなど用ゐられる

陛下　殿下などは其の左右を指すもので、轉じて二人稱の人代名詞となり、又轉じては三人稱ともなるのは、あながち道理の無い事ではないけれども、しかし善い語では決してあるまい。

（乙）卑稱

め（奴）　男（ヲトコ）

接尾語には自卑や關係崇敬や一般崇敬の區別はないので、卑稱として擧げるが、此のめ男は一人稱の時は自卑となるのである　私め　大犬丸男など。（國學院雜誌第八卷第六、第七號所載）

（大尾）

明治四十一年十二月五日印刷
明治四十一年十二月十五日發行
大正十五年十一月二十日增訂印刷
大正十五年十一月二十五日增訂發行

高等日本文法
定價金五圓八拾錢

不許複製

著者　三矢重松
東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者　三樹退三
東京市本所區番場町四番地
印刷者　守岡功
東京市本所區番場町四番地
印刷所　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目
【振替貯金口座東京四九九一番】
株式會社　明治書院
電話神田（25）一四一四番
二六六一番
九九六五番

金子元臣先生著 ◇枕草子評釋 菊判 全一冊 定價七圓五拾錢 送本料廿四錢

和田英松先生 佐藤球先生著 ◇重修增鏡詳解 菊判 全一冊 定價五圓五拾錢 送本料廿四錢

次田潤先生著 ◇古事記新講 菊判 全一冊 定價金五圓 送本料拾八錢

內海弘藏先生著 ◇平家物語評釋 菊判 全一冊 定價四圓五拾錢 送本料拾八錢

關根正直先生著 ◇紫式部日記精解 四六判 全一冊 定價壹圓五拾錢 送本料拾錢

鹽井正男先生著 ◇新古今和歌集詳解 菊判 全一冊 定價八圓五拾錢 送本料廿四錢

佐佐木信綱先生著 ◇增訂萬葉集選釋 四六判 全一冊 定價參圓貳拾錢 送本料拾六錢

64
391

終